

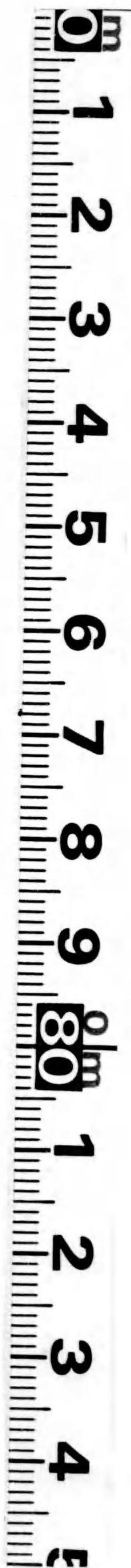
Lyman Abbott's
The Other Room

隣りの部屋

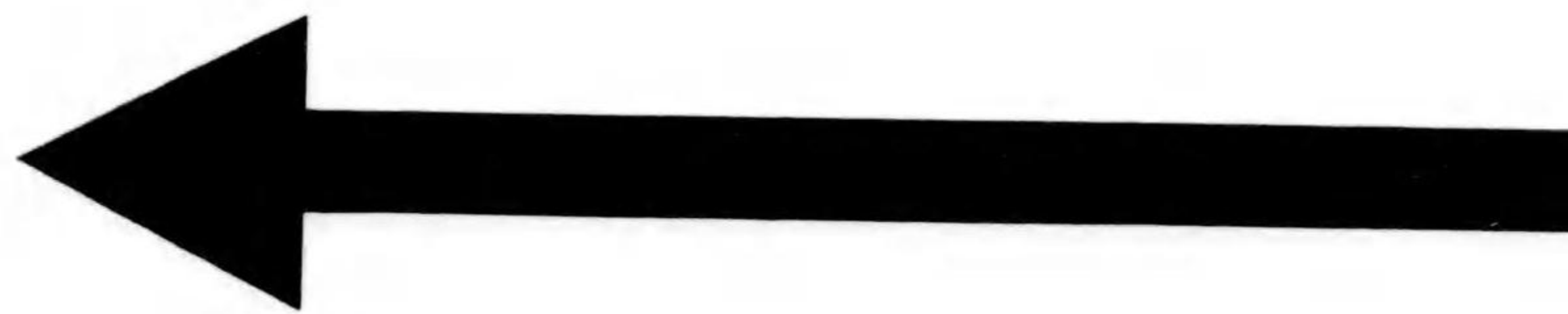
竹崎十八雄譯

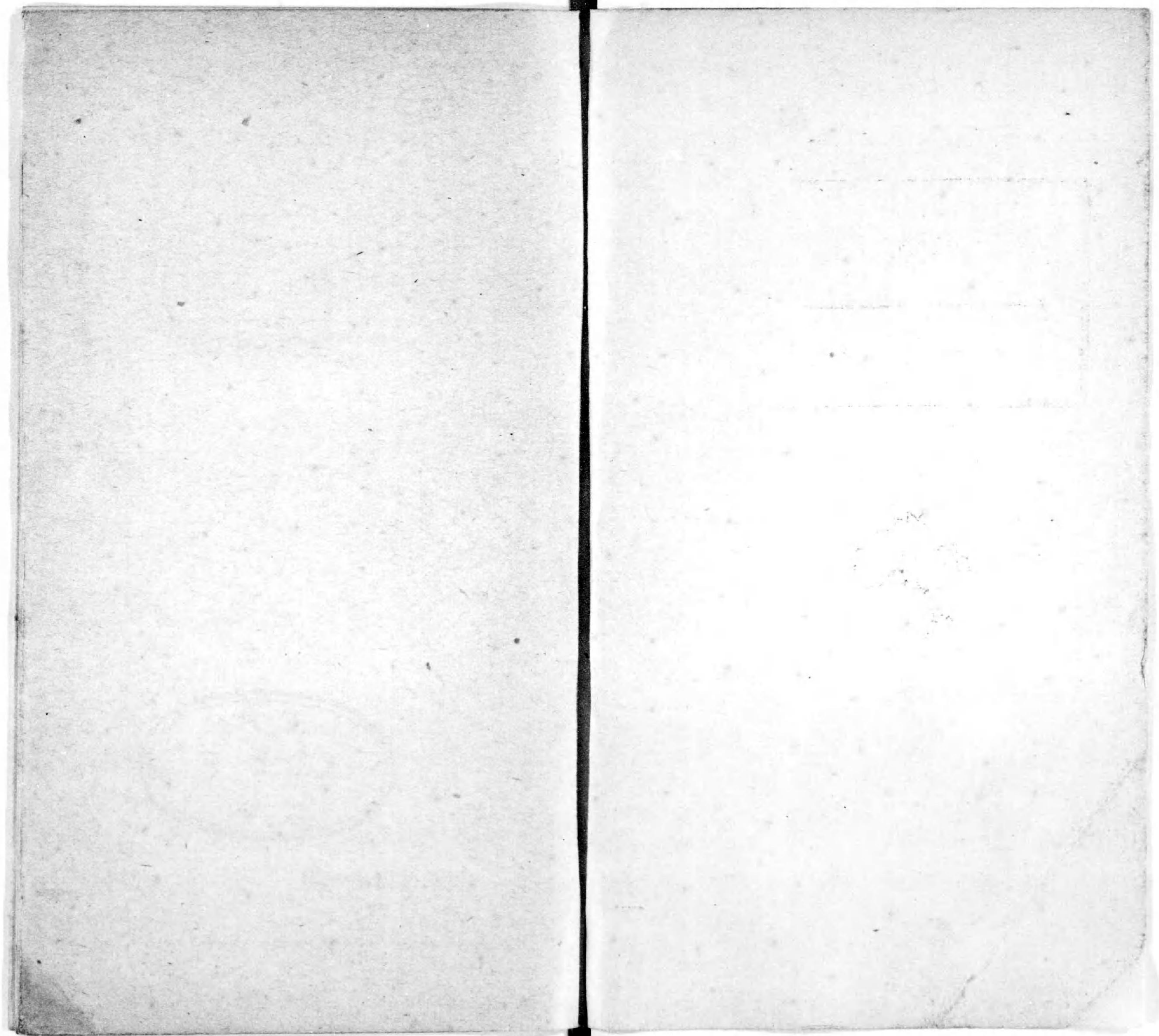


特



始







特100

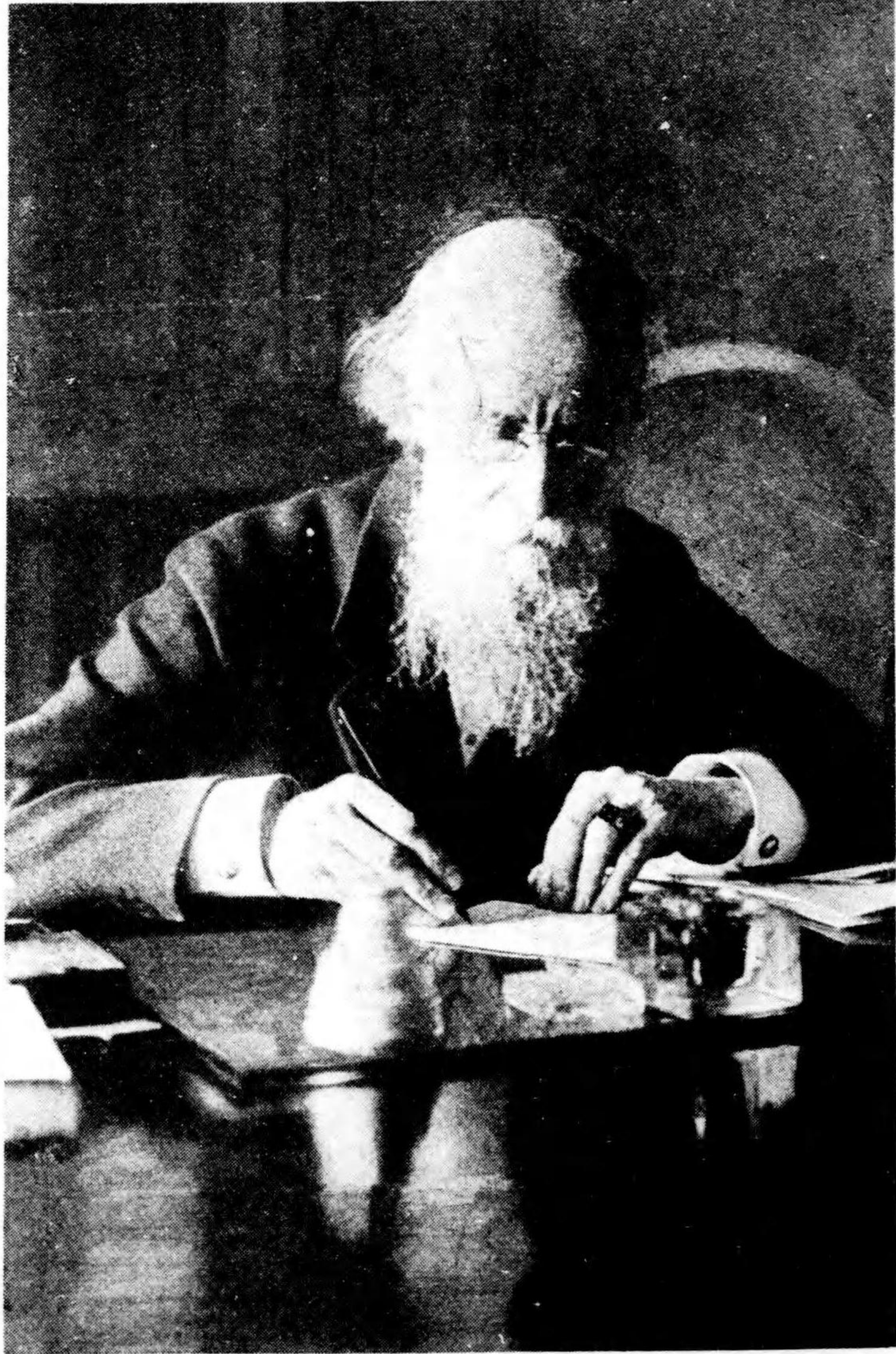
91

隣る部屋

竹崎十八雄譯

大正
8.6.12
内交

警叢書第一編



Lyman Hall.

緒言

本書の著者、ライマン・アボット氏は、有名なアウト・ルック誌の主筆であつて、八十二歳の老翁である。彼が壯者をも凌ぐ精力は、今猶鏗鏘として時務を論じ、毎日少くとも二回、教壇に立たざるこゝなしと云ふので知れる。彼は米國に於ける新神學者のうちで、最も常識に富み、獨創の見地を有する天才である。元來彼は辯護士であつて別に宗教界に立つ可き教育があるのでない。彼の神學思想は彼自身の宗教的實驗と獨學考究の結果である。千八百五十七年から八年にかけて大リヴァイバルが起つた時、彼はニューヨーク・ブルークリンのプリモス教會に出入して居た。プリモス教會は有名な説教家ヘンリー・ワルド・ビーチヤーの

牧する教會である。彼は此時分方向を一轉して身を宗教界に捧げた。爾來彼は直接に間接に精神界の指導者として今日に至つて居る。ピーチャム没後、彼は其後繼者としてプリモス教會の教壇に立ち、牧師として、説教者として、毫も遜色なく其職責を完うした。殊に彼の文章に至りては平易流暢、思想斬新にして又深刻、アウト・ルック誌の名世界に知られ雜誌界の權威と稱せられるに至つたのは、實に彼あるが爲めである。其著述せる書籍一として世人に歡迎せられざるなく、本書の如きも既に十八版を重ねるに至つた。譯者昨年米國に遊び、再び莫零パークレーの母校に入りて神學を研究せし時、アホット氏の著書を愛讀し特にこの書によりて得る所少なからず、直ちに氏に乞うてこれを邦語に翻譯する事となつた。

思ふに生と死は人世の二大問題である。人は皆遅かれ早かれこの二大問題に遭着する。之

を解決すると否とは人生の岐路である。此書は實にこの二大問題の根本義を基督教の立場によりて解釋したものである。勿論譯者は徹頭徹尾、原著者と見解を一にする者ではない。隨分原著者の信仰には極端な點がある。その立論には無理がある。けれどもその短所を去つてその長所をとらば讀者を裨益する事決して尠からざるを信する。若しそれ、子を失ひ妻と別れて憂愁の内にある人にとりては、この書が如何に慰藉を與へ光明を與ふるかは勿論であらう。

大正七年十月五日

札幌獨立基督教會に於て

竹崎八十雄

目次

隣れる部屋……………一

附 録

神の人モーセの死……………八一

聖靈の歎き……………九三

人もし新に生れずば……………一〇五

人間の努力……………一二三

閉ぢたる室……………一三九

目次

隣室

サレムの都は諸國の人で埋もれ、シオンの大路は上を下への雑沓。戸毎に溢れる旅客、野に山に數へきれぬ天幕の賑ひ。これ實にユダヤ人等が年々歳々行ひ來れる逾越節の光景である。彼等はこの民族的誕生日とも云ふべき紀元の大節を祝せんが爲めに、千里を遠しさせずして押寄せ來るのである。此祝日には歡喜と云ふよりは、寧ろ莊嚴な祭禮の氣分が漂うてゐる。つまり過去に於ける神聖な思出と、現在の國辱に對する悲憤とが混つてゐるのであらう。

けれども之が又、親戚知己相會して久瀾の情を温めるには最好の機會で、同じ食卓を圍み犠牲の肉を分つ其樂は、さながら米國に於ける感サンクスギビングデー謝祭のやうである。

斯く心も空のエルサレムを知るや知らずや、基督は今、雜然騷然たる巷を出で、弟子等と共に、とある家の二階座敷に入り給ふた。云ふ迄もなく、諸共に逾越の晚餐を祝ひ、更に又之に新らたなる意義を與へんが爲めであつた。(譯者曰、ユダヤ民族が埃及の羈絆を脱して獨立自主の國民と生れ出でたと云ふ政治的なる意味にて、逾越節を守るは國民の至情、基督も亦世と共にその喜を分ち給ふのである。けれども之は舊るき意味に於ての逾越節であつて、神がモーセを通してユダヤ民族に與へ給ふた恩寵に過ぎない。新らたなる意味の逾越とは、神が基督を通して全人類に與へ給ふ恩寵である。この逾越によつて、全人類は基督によりて新

らたに生れ出づることを意味する。モーセは政治的解脫を與へて、ユダヤ建國の基を置き律法を制定し、基督は宗教的解脫を與へて神の國の基を定め、人類を救うべく、罪より生に逾越さしめ給ふのである、モーセの逾越節は政治的であり又民族的であつて、犠牲を捧げて神恩を感謝したが、基督の逾越節は宗教的であり、世界的であつて、自ら十字架の上に賣血を流して神の愛を顯はし給ふのである、新らたなる意義とは即ち之である) さあれ、憐むべきは師の心を知らぬ弟子等である、主の精神に共鳴する能はざる僕等しもべである。彼等の心は基督の心と共鳴せずして、寧ろ世と抱合した、彼等はたゞユダヤ王國の爲めに第二の逾越を祈つた、即ち神がモーセをして、埃及の權威よりユダヤ民族を救ひ出し給ふたやうに、希くは、今基督によりて羅馬の權威よりユダヤ王國を救ひ給へと云ふのが彼等の祈であつた。それでこの

逾越節こそは彼等が積年の本願を成就するに最も適富な機會であるとは、決してイスカリオテのユダ一人の野心でなく、マテロもヨハネもその他の弟子も皆等しく之を熱望したに相違ない。甚だしきに至つては、彼等は必らず基督の王國が成就せられるものと信じ、其時の至るを夢みて、神の國に於て誰か大ならんと論争し、或は位置の上下をすら争ふに至つた。實に淺間しきは心、拂ひ難きは心の埃である。斯る弟子等と共に聖新の意義に於て逾越の晚餐を祝せんとし給ふイエスの心事果して奈何。イエスは席を立ち上衣をぬぎ、手巾をさり盤たらいに水を盛り、聖き御手もて、汚れたる弟子等の足を洗ひ給ふた。一人一人にイスカリオテのユダに至る迄、恰も主人に仕ふる奴隸の如くに、手をいたはる親の如くに。之れ實に不言實行の聖訓、深甚美妙の法である。弟子等は自ら願ひて如何に感じたであらう、主の聖足をすら

洗ふ事をせざりし彼等は互に其友の足を洗ふことなかりしは勿論である。彼等は今、流石に一視同仁、主の無限の愛に洗はれて、新たなる愛の世界に醒めて、爾曹相愛せよと云ふ主の誠を聞いた。主を愛するの愛は一層の熱を加へた。主の爲には命をも惜まじと決心した、然るに意外！ イエスは、爾曹一人だに我に従ひ得る者なく、或者は我を賣り、或者は我を識らずと云ふべしと云ひ給ふ。彼等はどうか考へても、そんな事のあらうとは信ぜられぬ、けれども基督の靈眼にはそれが明瞭な既定の事實である。確信は即ちその言の權威！ 彼等は只黙するのみであつたが、遂には幾度となく繰返しつつ預言し給ふ主の言が、如何にも現實せられて、敵の計畧は成功し、彼は敵の手に囚へられ、十字架の宣告となりはせないかと信ぜざるを得なくなつた。果せる哉それ等の事實が今、目前に迫つて、眞黒い其影が見える恐しい

刹那となつた。ア、幾年の苦心遂に空しく、アブラハムの國は救ふに詮なく、剩へ、主は罪なくして十字架に、而して共に死を誓ひし苦闘の友も憐れ牧者なき羊！弟子等の心は憂に悶え、悲に沈むだ。ガリラヤの海波あれて、舟將に覆へらんとする時の如く、この非常の時！

平静にして變る事なきはイエスである。彼は靜かに口を開らきて、
「なんぢら心に憂ること勿れ神を信じ又われを信すべし。わが父の家には第宅おほし然らずば我預て爾曹に之を告べきなり我なんぢらの爲めに所を備に往く」

ヨハネ傳十四章二一——節

と云ひ給ふた、之れ實に皆人の愛誦措く能はざる聖句であるが、その眞意義を解し得る者果して幾何であらうか。

宇宙は神の家である、この世界のみが必ずしも我等が生活する唯一の住居でない、かれの家には多くの部屋がある。死とは何か、押戸を開いて、此室より彼室に遷り行くのである。かう考へて見ると、始めて基督の教訓も、死と永生の問題も始めて了解せられる、云はゞ靈の鍵！

死はもさより透視する事の出来ぬ暗黒な幕である、何時迄かかつて、その向ふに何があるかを知るは容易でない。さらば生の問題をそちのけにして、徒に死の問題に没頭す、愚これより大なるはなし、寧ろ、我等が現在すまつてるこの室即ちこの世で、完うせなければならぬ義務、盡さなければならぬつとめ、父なる神が爲せよと命じ給ふその聖旨を實行して、而して後他室の問題に入るのが當然の順序であらう。未だ生を知らずして敢て死を問ふ事勿れ、先づ生の問題を汝の爲めに解決せよ、而して死の問題に遷れ。如何に生きるかと云ふ事

がつまりは死を奈何と云ふ解決である。

とは云ふものの、我等が多くの友は、たえず、此の室より彼室へと急ぎつつある、我等も亦遅かれ早かれその時が来る、さらば今、少くとも、死の懼を除き、死の刺をくだく事は、決して無用であるまい。

如何なる哲學も生の神秘を解釋する事が出来ぬ。如何なるものでも、矛盾せる凡ての現象を容れ得る程大きくない、之をよくするは唯基督とその宗教あるのみである。

神は我等と共に在ますと信じながら、天に在ます我等の父に祈れと教へ給ふ。基督の教は矛盾を容れた器である、弟子と共に物語りつつある基督が、留守を僕等に托して旅行せる主人になぞらへ給ふも、一見大なる矛盾の哲學である。生を與へ給ふ神が同時に死を與へ給ふ

と云ふ事の矛盾であるやうに。けれどもその教の眞理であるとは基督者の經驗によりて十分證明し得られる、現に、我等は時として在さざる留守の神を觀じていと遙かなるを覺ゆるこころがある、さうかと思ふと、呼吸よりも密接に、手足よりも近く神を觀することがないではない、彼は自由に來り又往き、今見え又見えなくなり給ふ、けれども決して我等を離れ給ふのではない。

嘗て我父ジャコブ・アポットがポストンのマウント・ヴァルノン女學校の校長であつた頃、彼はよく、始業式の後、數百の生徒をその儘に残して校堂を出行くのであつた。生徒は全く自由である、何人の監督もない、秩序を亂したからとて罰せられることもなければ、秩序を保つたからとて譽められるでもない、全く彼等の爲すがまゝであつた。つまり我父はかくの

如くにして、赤裸々な彼等の言語動作を見て、如何にせば、彼等を眞の女性たらしむべきかを考へたのである。

神も亦かくの如く、稍暫し我等を遣し給ふ、神在さずと思はれる迄に、我等の前には何等の賞罰をも示し給はぬ。神は我等が如何なる子供であるかを見て、如何にすれば我等が賞罰の觀念をばなれ自らすゝむで正義を愛し惡を憎む神の子となり得べきかと、其途を講じ給ふのである。(こゝに神とは基督を意味し神の子とは父なる神の子と云ふ意)、何處に彼は行き給ふか、隣室にと彼は云ひ給ふのである、彼は見えぬ、然し離れて居給ふのではない、さもない時は彼は其時も我等の裏に在し給ふのである。故に「視よ我は世の終迄常に爾曹と共にあるなり」と云ひ、又「我が往くは爾曹の益なり」と云ひ給ふた。

基督は時ありては我等と語りて我等の靈を燃えしめ、時ありては、我等と共に食卓を圍むで、我等の爲めに、パンをさき、パンを祝して聖餐を分ち、やがて又消え去り給ふ。この現るる事あり、又消え去る事ある基督が、かくも不思議に、思ひがけなき時と所とに於て我等の生に出入し給ふと思へば、現はなる時も現はならざる時も、彼は常に我等に近く在まし給ふことを信ぜず居られない。さらば彼が、「われ爾曹の爲めに所を備へに往く」と云ひ給ひしその住家とは、決して遙かなる所にあるのではなく寧ろ隣室と云はればならぬ。

果して然らば、世を去りし我等の友も主と共にあるが故に、よし我等の眼には見えずとも彼等は今も猶ほ世に在りし時の如く、我等と共に住つて居るのである。

使徒パウロは「我願は世を逝りて基督と共に存らんこと也、これ最も美事なり」と云つた

彼は我等を離れ去つたのであらうか。否、基督はその教會と共に在ますが故に、基督と共に在ることを願ふパウロも亦教會と共に在るに相違ない。愛する者を離れてどうして愛情の満足が得られよう、愛の満足なき所に何の極樂が見出されよう、基督は我等を愛し給ふ、故に我等を離れて何處に天國を求め給ふべき、故に彼は世の終迄我等と共に在し給ふのである。神在し基督在し而して我等も亦ある所、其所に天國はある。さらば召されたる汝の母も子も友も基督と共にあるを得ば、基督は汝と共に在し給ふが故に汝の母も子も友も亦汝と共に在るのでないか。

基督は彼と共に十字架につけられし罪人の一人に、「爾今日我と共に樂園パラダイスにあるべし」と云ひ給ふた、そのパラダイスは遙か／＼離れた西方極樂淨土ではない即ち隣室であつた。

凡て世の中に流行する迷信には多少の眞理がある。人が信するのは間違だから信するのではない、眞理がなければ流行するものではない。たとへば巫スピリチュアリストなる者は頗る怪しむべきものである、彼等は随分いかゞはしき方法を以て人を瞞着する。凡て樹はその果によりて知らる、論より證據、彼等は何等世を益せず人を利せぬ、故に苟も多少素養ある人にして、彼等を信する者はない。けれども何が故に一時非常な勢力を得るか云へば、彼等は教會が動やもすれば無視せんとし、甚しきは否定せんとする眞理の證明者として立つからである。其眞理とは外ではない、「死は生命の斷絶にあらずして移動である」云ふのである、言ひ換ふれば、死は死でない生である、逝去すぎさるのでない、共に住ふのである、たゞこの閻しやうを越えて隣室に移り行く迄のことである。

詩人はよく我等の相見る能はざる友が今も猶ほ依然として交りをなし、在りし昔の如く來りて、闇々裏に我等を助け事を遂げしめ、或は我等の相談相手となりて、不思議にも我等を導いて呉れることを夢みる。人は詩人の夢と笑はゞ笑へ、我等にとりては夢にあらず事實である。常に不見の世界を見るは詩人である。彼等はその心眼に映じたる事をそのままに證明するのである、どうして一笑に附することが出來よう。我等は彼等の預言を無視することは出來ない。彼等は自ら然信じ、而して我等も亦之を信ぜよと教ふるのである。

汝は遙かなるが如くにして常に近し

我は今も猶汝と共にありてよろこぶ

汝の聲はますますしげくわれをかこめば

たゞへ我死するとも汝を失ふことあらじ

暗く 黒

基督が生の眞意義と靈魂不滅の實證を示し給はなかつたら、死は永へに、人の凡ての希望を滅絶したであらう。尤も遺されし者の愛はある、けれども希望なきの愛は、要するに辛辣なる悲哀である。古代の希臘人の墓地を見た人の話に、何れの石碑にも未來の希望を銘したるものがないと云ふことである。勿論彼等とても、死が萬事の終だとは思はない、矢張死後の存在を信じてゐる、然れどもそれが只漠然として影のやうな、徹底せぬ不滅説である。ホー

マーの詩に、死せるアキルレスが、「我は死して亡者の世界に王たらんより、寧ろ人夫となつて地にながらへん、たゞへ卑賤の人に仕ふるとも、何等のよろこびなきにまさる」と云つたのを見ても、陰府は即ち聞かず、見えず、生命なき、蔭くらき住家であつて、只居るものは生の影、聲の山彦、幻の假託である。

畢竟するに、こんな間違つた死の觀念を抱くのは、生の觀念が根本的に間違つて居るからである。彼等は靈と肉との差別があることを知らぬ、之を譬ふればオルガニスト風琴手と風琴を同一だと云ふやうなものである。オルガニスト彼は琴を弾する、琴を通ふして彼の感情や思想や趣味や品性や即ち彼自身を表現する、さらばと云つて、琴は即ち彼ではない。然るに彼等は肉體の消滅と共に彼等自身の存在を失ふものと信じて居る。たゞへば肉體の死後靈の存在を認むると云つて

も、其靈なるものは何等の活力なき影のやうなものと思つてゐる。それで彼等は死骸を保存して其腐敗を防げば、せめては淡はき靈の生命をとりとむることもやさ、様々に苦心するのである。或は石柩に遺骸を納め香料を以て之を包み、或は木乃伊となし、或は北米の土人の武人の棺には武器を添へ、騎手には馬を添へて葬るを慣例とする。肉をはなれた故人の靈が希くは彼世に於ても劍を振り馬に騎ることを得ばその心やりであらう。希伯來人の來世觀も亦、之に類して居る、モーセであれ、預言者であれ死後の生涯について何等の明確な、より高き觀念をもたぬ。舊約聖書著書中、或者は靈と肉とを同一視して、肉の死を以て一切萬事の終となし、或者は肉體の死後靈の存在を信すれども、その來世が如何にも不自由な牢獄のやうな、を暗く陰鬱な下界だと説いてゐる、たとへば人世の無常を嘆するヨアの叫を聞け。

七それ木には望あり、假令砍るゝとも復芽を出してその枝絶えず、八たとひ其根地の中に老ひ、幹土に枯るとも、九水の潤露にあへば即ち芽をふき枝を出して若樹に異ならず、十然ど人は死れば消うす、人氣絶なば安に在らんや、十一水は海に渴き河は涸てかわく、十二是の如く人も寢臥てまた興す、天の盡きるまで目覺めず睡眠を醒さざるなり。

ヨブ記十四章七—十二節

詩人^{サミスト}も亦陰府^{よみ}を歌ふて忘失^{わすれ}の國と呼べり

十なんぢ死者にくすしき事跡^{みわざ}をあらはしたまはんや、亡にし者立てなんぢを讃たゝへんや、十一汝のいつくしみは墓のうづに汝のまこは滅亡のなかに宣べ傳へられんや、十二汝のくすしきみわざは幽暗になんぢの義は忘失の國に知らるゝことあらんや。

詩篇八十八篇十一—十二節

へせキヤ王も亦、死は生の終局であつて、神と別れ人と離れるのだと歎いた

十一我いへり、われ再びエホバを見奉ることあらじ再びいけるものゝ地にてエホバを見奉ることあらじ、われは無きものゝ中に入りてふたゝび人を見ることあらじ、十二わが齡はうつされて牧人の幕屋をとり去る如くに我れをはなる、われ織工の布を巻くが如くに我生をまけば彼は機より我を翦はなすなり、汝ぢ夕をまたすわれをたえしめ給ふ………十八陰府はなんぢに感謝せず死はなんぢを讚美せず墓にくだる者は汝の誠實を望むこと能はざればなり。

イザヤ書三十八章十一節—十八節迄

イザヤは預言者中の最も靈的な人であるが、然し彼すら、死後の世界を觀じて、生の力を

失へる影の住みだといつて居る、彼が死の國にバビロン王を歓迎する歌は如何にもよく、基督以前に於ける希伯來的來世觀をい描て居る。

四なんぢこの歌をさなへバビロン王をせめていはん、虐ぐるものいかにして息みしや暴れ狂ふ者いかにして息みしやと、五エホバあしきもの、笞ともろくの有司の杖とな、りたまへり、六かれらは怒をもともろくの民をたえず撃てばうち忿恚をもともろくの國をおさむれどその暴虐をとむる者なかりき、七今は全地やすみを得おだやかなることよく聲をあげてうたふ、八實に松の木およびレバノンの香柏さへもなんぢの故によりて歡びていふ、汝すでに仆れたれば樵夫のぼり來りてわれを攻むることなしと、九下の陰府は汝の故により動きて汝のきたるをむかへ、世のもろくの英雄の亡靈をおこし

國のもろくの王をその位より起ちおこらしむ、十かれらは皆なんぢに告ていはん、汝もわれらの如くに弱くなりしや汝もわれらと同じくなりしやと、十一なんぢの榮華となんぢの琴の音はすでに陰府におちたり、蛆なんぢの下にしかれ蚯蚓なんぢをおほふ、十二あしたの子明星よいかにして天より隕じや、もろくの國をたふし、ものよいかにして斫られて地にたふれしや、十三汝さきに心中に思ひらくわれ天にのぼり我れ位を神の星の上にあげ北の極なる集會の山に座し、十四たかき雲井にのぼり至上者のごさくなるべしと、十五然どなんぢは陰府におとされ坑の最下にいれられん、十六なんぢを見るものは熟々なんぢを視なんぢに目をとめていはん、この人は地をふるはせ列國をうごかし、十七世を荒野の如くし、諸の邑をこぼち、捕へたる者を其家にさきかへさざりしものなるかと

十八もろくの國の王たちは皆ことごとくたふとき狀にて各其の家にねむる、十九然ど汝は屠られし者劍にて刺ころされしものゝ間に投げすてられ陰府の眞底に降り行くものに踏みにじらるる屍にことならず。

イザヤ書十四章

よく人が、現代には人類發達の凡ての標本が見出されるといふ—石器時代や鐵器時代或は銅器時代はては岩窟生活、湖畔生活、奴隸制度、農奴制度、封建制度、勞銀制度、物神崇拜多神教、偶像教、心靈崇拜等何一つとして缺くるものなしといふ、然り少くとも、異教的な暗黒が恰も柩を蔽ふ黒布のやうに、基督者の墓地を垂れこめてるのは事實である、忌中だといつて黒ぬのを掲げるのはその表象ではないか、悔みだといつて愁傷沮喪の言をならべるのはその發現であらう、若しそれフィニシヤ人或は又埃及人であつたならかくも歌ふであらう。

ア、憂愁のいや深み、悲哀の夜のくらやみに

危難の途を辿りつゝ、王の戦死のみあさおひ

我等も陰府へと進むなり、我等は逝きし君の兵

されど基督の甦を信じ、生の意義と不滅の實證を示せる基督を信する者は、如何でか斯の如く、死を悲觀せる異教的の歌を歌ふことが出来よう、けれども、奈何せん、彼等は事實之を歌ふのである。何たる不信ぞや！ 彼等は猶ほ其人と其所有物なる肉體とを同一だと信する。彼等は猶その遺骸を柩に納め之を送つて墓地に至り、その愛するものは墓下に横ばれりと思ひ、其墓に至り座して歎げき、而してその肉がくちてもとの塵に歸りつゝあるその所に彼は在るなりと異やしき迷想に悶えつつ、ヘンリー・カルタ・ホワイトの徒となつて悲觀の墓

へと進み行くのである。

何ぞ徒らに死せる者の間に生ける者を尋ねるや、何ぞ悲哀の思出にのみ慰藉を求むるや。輝ける希望に汝の慰めはないか、如何ぞ悠久凄惨たる眠に閉ざされて、彼は遙かなる復活の日を待てりと思惟かんがふるや。

之れ實に異教にもまされる不信である、何となれば彼等はその悲歎に勝手な基督教の儀式を用ひ、その誄歌に基督教の讚美歌を唱へ、更に基督者の十字架を不信の墓石に立るからである。

我等さても愛する者のぬぎすてし肉の幕屋を納めしその墓には满腔の敬意と思出を禁ずることは出来ぬ、低徊や久しうして遂に去り難き思がする。號哭涕泣するも亦人間の至情である。然りその墓をして神聖ならしめよ、之を蔑にする勿れ。されば我等をして叫ばしめよ、

彼は生けるのである、死せるのではない。墓下に横はれるは即ち彼が脱ぎすてし肉の衣である。地上幾年かの生を托したる破れし器である。さらば徒らに肉の衣を抱き破れし器を懷きて泣かんより、奚ぞ希望の眼を開いて生ける彼を見ざるか、彼は生けるのである。死せるのではない、彼は神の如く生く、屍となりて朽ち果つるのではない。

光明遍照

基督は生の無限にして窮りなきを教へ給ふた。たとへ彼以前に靈魂の不滅を説いた人があ
るにしても、未だ彼の如く、世をして、此教に傾聽敬服せしめたる者なし。恐らく彼以前に
於ては、希伯來文學であれ異教文學であれ、生の存續を説ける者はあるまい。實にこの永生
の觀念に至りては彼の使命の眞髓とも云ふべきであつて、彼の言語であれ、假定であれ、將
又、沈黙であれ、一として此觀念に基づがぬはない。

生は存續すべきものである、斷絶するものでない。眠りてのち醒めると云ふは非、一度び
黄泉の客となつてやがて又木乃伊の屍に歸ると思ふは更に非である。生は絶間なく進み行く
のである！これ實に基督の獅子吼である。彼の教を學ぶ者は必ず如上の結論を是認するで
あらう、假令、文字通りにかく教へ給はなかつたにしても、之が彼の教の歸着する所ださ云
ふに疑ふ餘地はない。

彼は云ふ、「我汝等に永生を與ふ」さ、與ふとは現在である。今汝は此處に永生をもてりと
云ふ意である。其時代のパリサイ人は、永生とは世の終の甦の日に見出さる可きものと信じ
て居た。然るに基督は汝もし神の子を信ぜば永生をもつべしと云ひ給ふた。

彼がラザロの墓に来て、マルタに向ひ、汝の兄弟は甦るべしと云ひ給ふた時、マルタは答

へて、彼は末日の甦るべきときに甦るでせうと云つた。それでイエスは、「否さうでない、凡て生きて我を信するものは永遠も死ぬることなし、我は甦なり生命なり、我を信する者は死ぬるとも生くべし」と仰せられたことがある。信は即ち甦である、不斷常住の生に活きるのである。我等が織りなせる生の錦は、死も猶截断つべからざるものであつて、見ゆべきものより見ゆべからざるものに遷り行くのである。彼が訣別の言にはこの眞理が云ひ現はされてゐる。基督は云ひ給ふ、爾曹は我が死を以て恰も我が存在の終局であり消滅であるかの如くに思ふ、けれども決してさうではない。我は我が父に歸り行くのである、父に歸るとは決して爾曹を離れ去ることを意味せない。我は生く、我が父は我と共に在し給ふ。我も亦彼と共に住み汝等と共に住むのである。我生は決して死によりて斷絶せず、死は我を汝等より奪ひ

去ることは出来ない。否、我は前にもまして爾曹と共に在ることが出来る。われはわがために父のもとに歸るのである。けれども同時に又それが汝等の爲である。かくて肉の人として爾曹と共にあるよりは、より善く爾曹の爲めに盡し、より多く爾曹と共に住む、より近く爾曹と共にあることが出来るのは如何に幸でないかと。

基督は如上の眞理を説明するに足る三の甦を行ひ給ふた。曰くカイロの女、曰くナインの獨子、而してラザロの復活である。

彼はカイロの女に至り、「女は死ぬるにあらずたゞ寢たるのみ」といひ、女の手を執りて「起きよ」と命じ、活ける魂を再びもとの住家に歸し給ふた。確に幕屋は地におちたのであつた然るに彼は去りにし人を呼戻し再び幕を張つて、之に住ましめ給ふたのである。

路加は傳へてふ

三〇

十一翌日イエスナインと云へる邑に往けるに許多の弟子及び許多の人々も共に往けり、
十二邑の門に近づきし時昇出さるる死人あり其母は隣にし此は獨の子なり邑の人々多く
之に伴ふ、十三主髻を見て憫み哭く勿れと曰て、十四近より其櫬に手を按ければ昇る者ども
止まれりイエス曰けるは少者よ我なんぢに命いのちおきよ、十五死たる者起て且言ひ始むイエ
ス之を其母に予せり。

路加傳七章

ナイン城外二種の行列を見よ、一は生命の主を慕ふ隨喜の衆生であつて、他は亡者を送る
愁傷の群である。前者を生いのちの行列と云はば、後者は即ち死しの行列である。此二種の行列は端
なくもナイン門外にて相會した、イエスは忽ち生死相互の列をとめて、若者の手をとり、我

なんぢに命いのちす起よと叫び、靈を呼んで再び形骸に返へし、其子を慈母の懷に與へ給ふた。何
等の異觀ぞや！ 彼がラザロに往き給ふたのも亦同じ使命の爲めであつた。奚ぞ死あらんや
彼は死んだのではない、眠つたのだと云ひ給ふたが、弟子たちは其意を解することが出来な
んだ。それで言を改めて彼は死せりよと云ひつつ、弟子に命じて墓石を取去らしめ、さながら
相對して談るが如くにラザロを呼び給ふた。靈は再び舊に復し、肉は再び生きた。ラザロは
逝かなかつたのである。死ななかつたのである。彼は生きて居たのである。まのあたりに、
その體を離れて。

如上三大甦よみがへりの事實に表象される眞理を、美妙に云ひ現はした詩がある、それはロンツター・
レイモンドの訓慰者イエスである、既に此詩によりて悼める心をいやされしもの幾何なるを

知らず、更に願くはその慰安を他の人々にも頒つことを得んか。

三二

訓慰者イエス

なきがらの ほとりにて ひざまづき

祈ればふしぎ そもたれか

見れば主エスぞ たちたまふ

彼はほゝゑみ 「恐るゝな」

主よなんぢ 死に勝てり ねがはくば

ふたゝびいのち かへしませ

今しゆきたる このものに

彼はほゝゑみ 「など死なん」

眠れりと 主よなんぢ のたまふか

まぶたはとぢぬ されど主よ

ひらきたまはる すべもがな

彼はほゝゑみ 「眠りあす」

いなさらば おきもせめ わがいもは

三三

とこよのくにの あさぼらけ

いたむこゝろに 歸へしてよ

彼はほゝゑみ 「逝かざるを」

あな あらは 明顯 わればしる うせにしな

望まじなまた よろこびも

死の川こえて わたるまで

彼はほゝゑみ 「渡らずも」

奈何せん いとしびと ちかゝれさ

慕ふもしらで さほざかる

彼等はされど 主のみまへ

彼はほゝゑみ 「こゝにあり」

あゝ君よ 知らまほし いかにして

彼等はみえず 今もなほ

眠らず逝かず 在らんとは

彼はほゝゑみ 「われに居れ」

我等はイエスを信するが故にその教をも信する。彼は眞理を搜索研究してその結論に達する道を示す哲學者ではない。彼は至誠至眞なる證明者である。「我儕知りし事をいひ、見し事を證す」とは彼の言である、彼の教は眞理の證明である、その説明でない。

試に、「フアイドー」を讀むで、哲人ソクラテスが刑に處せられる際、その弟子を慰めたる言を學び、更に聖書を繙いて、イエスが十字架の前に弟子等を慰め給ひし言とを比較せば、思ひ半に過ぐるであらう。一は不知の世界について眞理を探求する哲學者であつて、一は不知の世界につき知り得たるその眞理を證明する神人である、其處に鮮明なる差別がある。イエスの談りしものは、彼の知れる所である、彼は決して迷想に誑かされたのではない、故に見よ、彼の證せし希望一として過つことがないではないか。彼は決して幻の影を逐ふ空想家ではな

かつたのである。故に彼れが「我父の家には第宅多し」と叫び給ふたのは、決して神巫の臆測でもなく、預言者の希望でもなく、又哲學者の結論でもない。彼は彼自身の實驗によりて、その熟知せる生の眞意義を實證し給ふたのである。茲に至りて光明遍照である、生も死も彼によりて極めて分明である。

甦の初穂

イエスキリストの甦は非常な事件と云はんよりは、寧ろ普通な事の非常な證據と云はればならぬ。人は死すれば必らず甦へるのである。故に甦は必ずしも非常な事實ではない、死は靈肉の分離である。云はゞ樂手その席を立ち、彼の彈きなれし樂器をのこして去るが如く、琴は破れて地に還へれども、伶人猶存在する。土は土に、灰は灰に、塵は塵に、而して靈はその出でし神に歸り行くのである。死さは何か。塵は塵、灰は灰に還へるのである。而して

甦とは靈がその出でし神に歸るを云ふのである。この二つの事は時を同うして行はれる。

イエスキリストは外より與へられた力で甦り給ふたのではない。彼は自ら限りなき生の力をもち給ふた。彼は即ち甦であり生命である。故に彼は死することなく、死も亦彼に王たることはない。彼はその生命を捐て又之を得るの權能を有し給ふのである。故に彼は再び生命を得んが爲に之を捐て給ふた。彼の生は存續して破るゝことなく、彼の肉は死して墓に葬られ彼の靈はその出でし神に歸り逝いた。かく云へばとて何等の不思議はない。けれども茲に注目すべきは、これ迄認められずにあつた甦の眞理が、彼の甦によりて、あらはに弟子等によりて目撃されたことである。かく云へば多くの人は尋ねるであらう。その視たと云ふのは夢幻ではないか、その觸つたと云ふは靈體ではなかつたか。もしもさうでないとするれば、なぜ甦りし

キリストは裸でなく衣をまとふてゐ給ふたか、彼は一度脱ぎ捨てたその肉を再び活かす爲めに歸つたのかと、次から次へと多くの問題がおこる。けれどもかくの如き問題は要するに我等には無用であり、又不可知である。

唯こゝに疑はんと欲しても疑ふことの出来ない事實は、イエスの生の存續があらはに目撃せられたと云ふことである。さもなければ弟子等が如何にしてかくの如き信仰をもち、希望をもち、勇氣をもち得たかゞわからない。彼等はイエスの存在を目撃したのである。ピラトの權威も彼を滅ぼす能はず、心臓の破裂も彼を毀つ能はず、墓も亦彼を囚ふる能はざるを目撃したのである。而して彼等は此事實の證人となる爲にその命をも惜まなかつた。誰か幻の爲めに、空しき不確實なことの爲めに、その命を捧ぐる者があらうか。然かも基督の甦は一二

の人の實驗でなく、多數の人の實驗である。キリストに敵し基督教の迫害者でありしパウロの改宗も亦實に、この甦の實驗に基づくのである。さらば基督の甦を信するは教會の原動力であつて、歴史的に云へば基督教はこの事實の上に建立せられたのである。

元來、基督教は決して單に新道德の哲學でない、寧ろ大なる歴史的事實と云はればならぬ。言を換へて云へば、世の救主なるイエスが此世に來つて、死に勝ち罪に勝ち、世の終迄我等と共にいまし給ふと云ふのが基督教である。

凡そ聖書に、基督に就いて眞實まことであると示すことは、同時に又、基督を信する者にも眞實まことである。彼は即ち甦の初穂である。さらば我等も彼の如くに、甦るであらう。我等の甦は基督の甦の如く、我等の生は又、彼の生の如く、死も亦、彼の死の如くならねばならぬ。イ

エスの甦が外よりの力に因らざるが如く、彼を信する者の甦も亦外よりの力に因る必要はない。彼等は鳥の卵より孵へるが如く、草の種より萌ゆるが如く死より甦るであらう。神の子等は其の父の有ち給ふ不滅の靈をもつべき筈である。基督に居り基督を信するものは不滅でなからねばならぬ。死より甦る者に死はあり得ない筈、故に、永生とは、來世に於て、神が其の子等に與へ給ふ賜でなく、靈魂不滅とはやがて將に受けんとする遺産でない。さらば、基督の甦は、未來に於ける奇蹟的復活の預言と云ふよりは寧ろ此世の明白な事實と云はねばならぬ。我等は彼の甦によりて、我等も亦神の子として神聖なる生の力を有することを知らねばならぬ。恰も一粒の種の芽さす事が、残りの凡ての種の發芽力を證明するやうに、神の子イエスの甦は、凡ての神の子の甦るべき證據であらう。恰も虫が、他の蠶を造つて蝶となる

を見て、已も亦かくの如くなり得べしと云ふが如く、基督の不滅の靈を見て、我等が不滅の靈を認むることが出来るではないか。

遮莫、我等はいつも空しき墓を見出すものである。そこには我の愛する者を見出すことは出来ぬ、たゞ在るものは残されし屍衣である、我等は墓に至りて泣く、愛するものを亡ひしその淋しさに泣く。然るに何ぞ知らん恰も基督がマリヤを呼び給ひし如くに、我等の友は我等の側に立ちて、我等の名を呼びつゝあるのである。マリヤが基督を知らざりしが如くに、我等も我等の逝りにし友の我等と共に在るを知らずして歎くのである。此故に天使は今も猶、我等が死せる者の間に生けるものを尋ねつゝあるを見てあやしむのである。墓石既に轉んで、死者はその門を出でた。『陰府の門は之れに勝つ可らず』といふ主の御聲が聞える。

地に落ちし葉末の露が、夢もなき

深き眠か望なき 未知の世界のさまよひか

朽つるまゝなる倒木の 御聲を聞かず

御力も御守さへなき 死は去せて

たゞひたすらに御名を呼び 御名を慕ふて生くるなり。

クリスチャンサイエンスは苦痛も病氣も否定する、之れ大なる誤である。死が事實であるやうに、痛も病も事實である。けれども人には、死も猶侵す能はざる至聖所がある。その所に痛も苦しむる能はず、病も衰へしむる能はざる潜める生がある。

殻は破れて朽つ、されど殻破るれば種子は自由を得、牢を出で、光にのび大空に上るの

である。かくの如く死は肉體を破壊するのである。この意味に於て死は事實である。人世には兎角まぬかれ難き苦と病とがある。人は此苦になやみ、病にかゝる時、來らんとする日の救を思出すといふ。されど之れ實に大なる誤であつて、苦も病も死も、皆これ救の器である。神聖にして不滅なる眞我の生は苦や病や或は又死によりて侵されるものでないとは聖書の教ふる所である。たとへこれと相容れざる思想があるにしても、よく、基督の教訓を闡明して、正しく解釋する時には何等の矛盾を感じないであらう。假令ば舊約聖書は殆靈魂不滅の何たるやを教へず、新約聖書には、パウロのテサロニケ前書に、やゝ異なる觀念が見出される。けれども、この書は彼の思想いまだ熟せざる時に屬するものであつて、彼はその當時、今にも基督が再來し給ふと信じて居たのである。その後彼の信仰も思想も圓熟の域に進み哥林

多前書を草したる頃に於ては、生の存續を説くこと極めて鮮かである。ピリピ書に於ては更に一步を進め、『我願は世を逝りて基督と共に在んこと也これ最も美事なり』といつて居る。要するに新約聖書を一貫して高潮せられたる教訓は、主イエスと交り且つ彼に養はるゝ人格的生命は、きはまりなきの生命であつて。この正義仁愛奉仕の生命は死せず滅せず、生より生にいやまさり行くといふのである。

靈 體

さらば體からだの甦よみがへはどうであらうか、肉體は甦らないのであるかさは多くの人の問はんと欲する所である。けれども我等は明白に、パウロと共に、「血肉は神の國を嗣ぐこと能はず」と答ふる外はない。肉體は即ち暫の假の住みである。その用なきに至りては倒れて朽つるのみである。人は皆な何れの日からその家を出で、更に大なる生涯に遷り、より善くより貴き住居を見出すのである。體の甦よみがへの如きは之を草に見、花に見、果實に見ることはある、されど人の

甦には其の必要がない。

聖書には何處にも、體の甦と云ふ言はない。そんな觀念は要するに異教思想の影響であつて、人とその住家とを同一視することの愚なるが如く愚である。神を物質的に考へて、神は人間の大きなものと説く哲學の不合理なるが如く不合理である。靈なる神を強ひて見るべき觸るべき偶像となすことの非精神的なるが如く非精神的である。死して葬られたる肉體が再び甦ると云ふのは、なき人を思ふやる瀬なき心に、信仰を與へず、望を與へず、愛を與へず、又俯むかすして仰ぎみ、振り返らずして前に進み、入らずして出づる精神を與へずして、徒に其の人の着たる上衣や、用ひたる樂器に執着せしむるものである。どうしてそんな事で無限展望の情を慰めることが出來よう。物慾的にも程こそあれである。かく形骸に執着す

るために、人は殆ど堪ふべからざる苛責に悩む、亡き母を送り、妻を送り友を送り子を送つて、柩將に墓に納まり土其上を蓋ふ時、絶望の涙にくるるは之が爲めである。

體の甦をさく人は朽つ可き肉體が奇蹟的に保存せられるかの如くに思ふ。さもなくば既に朽ちて白骨となり土と化したものが再び活きるのだと信ずる。靈魂不滅の教理もかく信ずるに至りては不合理の甚しきものである。

尤も使徒信經には明かに、身體のよみがへりを信ずる事ある。然し、これは、肉と人とを混同した時代の型にあてはめて、靈魂不滅を云ひ現はした迄のことである。

一度墓に葬られた血肉が復活すると云ふことは、我等の科學的智識が承知せない。不滅の靈と有限の肉とを同一だと云ふことは我等の靈的實驗が反對する。而して聖書は明白にかく

の如き異教的觀念を容るさない。新約聖書中、體の甦を説くはたゞ哥林多前書十五章あるのみであるが、パウロの説かんと欲する事は、所謂肉體の復活でない、少しく心をとめて此の章を讀まば自ら明かであらう。彼は寧ろ肉體の甦を否定してかく云つておる。

三五人あるひは問ん死し者いかにして甦へるや、如何なる身體にて來るか、三六愚かなるものよ爾が播く所の種まづ死ざれば生さず、三七又汝が播く所のもの將來はゆる所の體を播くにあらず麥にても他の穀にても只粒のみ、三八然るを神は己の意に隨ひて之に體を予へ種ごとし其のおのくの形體を予へ給ふ、三九凡ての肉同じ肉にあらず人の肉あり獸の肉あり、四十天に屬けるもの、形體あり地に屬けるもの、形體あり、天に屬けるもの、榮は地につけるもの、榮に異なり、四一死し人の甦るも亦かくの如

し、……四四 血氣の體にて播かれ靈の體に甦へさるゝなり、血氣の體あり、靈の體あり、

……五〇 兄弟よ我これを言はん血肉は神の國を嗣ぐことと能はず、……

彼は云ふ。我等が地上の生活に體が必要であるやうに、靈界の生活には靈體が必要である、地には地の體がある、天には天の體がある。我等は地上の生涯に於て有するこの體を天に携ふることは出來ぬ。たとへその遺骸を墓より取出すとも何の用をもなさない、血肉は神の國を嗣ぐことと能ざるが故である。壞るものは壞ざるものを嗣ぐと能はざるが故である。世の終りの甦の日に生存する者も、死すべく壞つべき體は先づ變じて不滅不朽のものとならねばならぬ。

オー逝きし愛子の爲めに泣く母よ。我子は獨り淋しく墓に横はると思ふ勿れ。雪降る夜半

に涙をそそぎ、花咲く春に無常を觀する勿れ。彼は其處に居るのではない。彼はいまだ嘗て彼處に行つたとはない。汝は彼を墓に納めたのではない。彼處に彼を訪ふとも彼は其所に居ない。汝は彼を父なる神の御許に送つたのである。汝は基督の祝福を得んが爲めに、彼を其の御手に委託ゆだねしたのである。主は呼び給ふ「嬰兒の我に來るを禁する勿れ、嬰兒を我に來らせよ、天國に在るものはかくの如きものなり」と。

生死一如

敢て死を問ふ者あり。我思ふに其問やよし、人は早晚この問題に逢着する。我等は生を問ふことの必要なるが如く死を問ふことの必要なるを思ふ。さらば死を奈何、我をして云はしめば生と死、此の二は一である。我は死者を見ること生者を見るが如く、親を祭ること親在ますが如し。一言にして云へば生死一如である。

何故に生死一如なるかを知らんと欲する者は、我がこの結論に達し、更らに又我が凡ての

思索の根柢をなす前提があることを知らねばならぬ。前提とは二つの世界を認識することである。一は外なる世界であつて他は内なる世界である。一は物質的で、他は精神的である。前者は曲ぐ可らざる自然法に支配せらるれども後者は自治自由の世界である。一を五官の世界と云はゞ、他は自覺の世界と云はねばならぬ。若し哲學者がこの二者は一であると云はゞ、敢て争ふにも及ばない。或はさうであらう。兎に角、自分は何を考ふるにも、この二の世を相互的に又對照的に存するものと前提するのである。今少し言を換へて之を説明しよう。此天地には永遠の靈がある、其の靈はたえず、物質世界を通じて己を表現しつゝある。彼は不斷不見の實在である。隠れてゐる。然し乍ら凡ての現象に顯現する。美と云ふ美には美を愛するの愛がある、凡ての工藝には智能がある。千萬の自然的運行には靈的自覺がある。皆、

れ大靈の發動である。その思ふ所は自然の妙工となり、その欲する所は生の事實となる、萬物これより發す、これ實に、在らざる所なく、在らざる時なき久遠實在の元氣である。

彼は不斷の自覺を以て諸の花に意匠をこらし、凡の力を運行統率し、父の愛を以て人類の歴史を攝理し、人生を教養するのである。さらば我と彼との關係は如何、我は彼より出たのである。恰も鍛冶工が眞赤に燃える鐵を打々發止とたく時、火の子の飛ぶやうに、其の火花が小さい鐵であるやうに、人は彼の如くにあるのである。美を愛し美を創造し、眞理を愛し眞理を叫び、義を愛し義を行ふこと彼の如くに、而して又醜と偽と邪を選ぶとも彼の如く、かく彼の自由なるが如く自由なるが故に、彼の友たるに適し、彼と一なることも出来れば彼と離るゝも亦自由である。彼の考ふる處を考へ彼の志を分ち、彼の生を共にすることも

出来る。さうかと思ふと彼に無頓着に何等の關係りなく、或は彼に逆ふも自由である。彼の仲間たり友たり得るが故に敵たることをも得るのである。

かく我靈は彼より出でたるが故に、わが有てる凡ての力は、彼の力の神聖なるが如くに神聖である。故にたとへ神聖ならざることをの爲めにその力を用ふる場合にも、我は之を用ひて、見るべき形に表現し得るのである。而してそれ等の表現せる形はもとより力の創造せる者であるが繪と美術家の差別ある如く、歌と歌人の相違のあるが如く、或は我が住家、我れ之を建て、之を考案せる家の我にあらざるが如く、憤怒の炎、眼より輝くが如く、愛のほほゑみの口唇より漏るゝが如く、繪であれ、歌であれ、笑であれ、決して我でもなく、我部分でもない。たゞ表現である。恰も電光や野の花が神にあらす神の部分にもあらす、神の表現で

あるやうに、繪は畫家にあらす、歌は歌人にあらす、笑は嬰兒でない。笑は歌や畫筆で表現することの出来ない妙に麗はしき魂の示現である。

我はかくの如き觀念を前提として凡てのことを考へる。神を考ふるも我を考ふるも人を考ふるも將た又生を考ふるも之を前提とするのである。故に我が死の觀念を聞かんと欲する者は、先づこの更に大なる思想即ち死も生も過去も現在も未來も、科學も技能も藝術も詩も自然も、歴史も傳記も神も人も抱容するこの觀念を理解するを要す。

誰でも、これを前提として考へるならば、人の發達に三階段があるのを自覺するであらう。第一は形を以て心の役となす生活である、云ひ換ふれば、形體の機官が精神の生活に用ひられる時代である。精神生活の始めには形體の機官に負ふ所が多い。即ち此時代には父母教師朋

友の精神生活が、目により耳により觸感によりて示現する。兒童の精神は此等の通路を辿つて、やがて父母の如く教師朋友の如き精神生活に發達する。彼は此等の機官によりて、觀察し反省し推理し感動し志望することを學ぶ。故にもしこの機官を缺如せば、たとへ形體の生活と精神の生活が差別あるにしても、その發達は甚だ困難であらう。

第二の階段は精神の成長が如上の機官を通して、或程度迄鼓吹啓發したる時、一方にはその成長を繼續しながら、他方に於てはその機官を通して他の靈の成長の爲めに貢獻することである。即ち畫家は其作品によりて、之を見る人の畫心を啓發し、教師や牧師は聲によりハシによりてその智と情とを誘導するのである。

第三の階段に達すれば、今迄必要であつた、機官が精神の齒止となる。即ち畫家が其筆を

以て説明する能はざる美を感得したる時、詩人が文字を以て描寫する能はざる眞理を自覺したる時、牧師が曰く言難き生の神秘を悟つた時、人は擧つて彼の作品を嘆賞し、その詩を愛誦し、その説を傾聽しても、彼等はいやまさり行く煩惱と不満とを感ずる。云ひ換ふれば彼等の生活はその有する機官を以て實現するにはあまりに大に、あまりに優美となつた。彼は筆以上の筆を以てその美を畫かき、文字以上の文字を以てその眞を歌ひ、言語以上の言語を以てその生を叫びたくなる。加之、痛切にこの要求を感ずるにつれ、筆も投げたくなる。文字もすてたくなる。言語も詛ひたくなる。機官と機能の貧弱さが益々自覺せられる。彼の目は見る能はず、彼の手は觸る能はず、彼の腦漿も意の如くなる能はず、彼の思ふがまゝに浮び來りし言語も、今は遅々としてきれぬに、遂に一言半句も出て來ぬ迄。

かく形體の機官ことごとく其用をなさず、却て一種の束縛と感ぜられる時、いつまでかく不自由な生活を地上に送らなければならぬかと考ふれば、誠にたまらない程厭になる。嘗ては美麗なる宮殿の生活として樂まれしこの世、今は牢獄のくるしさを覺ゆる。幸にして、此時の來る迄には大概、牢壁は壞れ落つる。而して解放せられたる靈は更に大なる發達をなす爲めに、新しい未見の住居に移る。かくて價を失ひし無用の器具は取去られ、短かき地上の教養は終りを告げ、更に新しき世界に召され、より豊かにより麗はしき生活を營むに適當な支度が與へられる。肉體は其用を終へてその出でし土に歸り、放たれたる靈はそれとも知らずに準備し來つた行路に進む。さらば、死げ人生と稱する苦にがき夢より醒むるよろこびである。たとへ麗はしくとも猶囚はれの國たるをまぬかれぬ此世より、解放せられたるが如

く、普通教育を終へて専門の課程に進むものゝ如く、生は更に新たなる生に向つて進み行くのである。

さらば死者は即ち更に神聖なる使命をはたし、大なる生活を營む爲めに、此世に有せしものに優りて一層立派なる支度を有せねばならぬ。我もし永生に於て彼等と相交はるものならば、その時に及んで彼等の群に加はることを得るであらう。

彼等は我等を知り我等を愛し又我等の來るを待つが、然りである。我等は彼等を知り彼等を愛し彼等の群に入るを望むが、然りである。もしそれ、愛なく望なしとすれば、靈魂の不滅畢竟之れ何であらう、愛なく望なくして存在するは生とは云へぬ。常に失へる望と拒まれたる愛を以てながらへるは生も亦死と云はねばならぬ。

聖書や哲學が我に約する永生とは永眠ではない。信仰と望と愛、この三つが生要素である。我は決して聖句によりて學ぶべき暗示を絶対に主張せんと欲するのではない。明白なる啓示と詩的暗示とは自ら差別がある。けれども暗示にして價值あるのであるならば、必ず愛の存續を説いて、我等の生をいき甲斐あらしむるのは愛だと云ふに相違ない。

キリスト變貌の山にて、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ等はモーセとエリヤを見たと言ふ。こゝに愛の存續が暗示せられるではないか。パウロは、我願ふ所は身をばなれて主と共に在らんことなり、これ最も美事なりと云つた。其所にも愛の存續が歌はれて居る。けれども愛の存續は必ずしも物慾的ではない。キリストは、彼等は娶らず嫁がす天に在る使たちの如しと教へ給ふた。結婚は一面に於ては靈的であるが他の半面は物慾的である。甦の國に存するものは

物慾をばなれたる、靈的の愛である。靈的の生活とは、信仰と望と愛である。信仰は神に對する生活であつて、望は自我に對する生活、愛は人に對する生活である。神を愛し己を愛し人を愛するのである。故に永生は愛の生活である。その他の點に關しては我れ未だ未來の生活の如何なるかを知らず又知るを欲せない。

我はたさへば窓を開いて未知の世界を見るの力を有するにしても之を見ようと思はない。何んさなれば朝に夕に新たなる恩寵を注ぎ給ふ神は、我生涯の凡の時機に於て驚く計りの愛を我に示し、わが歩みの凡てを心にとめて限りなきのあはれみを垂れ、よろこびの日に感謝の心を與へ、悲しみの時に慰安の靈を下し、朝には雲雀、夕には杜鵑、一年は一年より、上善の年を重ね、經驗より經驗に進んでは恩寵の妙なるを歌はしめ給ふ。さらばたさへ、なし

得るわざなりとも、わが爲めに神が如何なる驚くべき未來のよろこびを備へ給ふかを慮かる必要は毫もない、たゞ聖旨にまかせ奉るのみである。

しらま弓生死一如の矢をつがへ

後の世かけて射らんとぞ思ふ

大神のめぐみに育つ身にしあれば

聖旨がしこしいづ地ゆくとも

不滅の行ひ

永生とは何時迄も死することなき生命と云ふのではない。痛むも病むも死ぬるも終ることなき生活を云ふ。即ち信仰と望と愛の生活である。此の如きは即ち不滅である。如何なる死の力も之に觸るることは出来ない。肉體の生命は常に死し常に壞れつつある。けれども信望愛の靈は死することなく、その生活は無窮である。何等時間の束縛がない。即ち永生とはある時間を越えて、後始まるのではなく、時間の範圍のない生活である。

基督は墓より出で給ふ時に不滅であつたやうに、十字架の上に於ても不滅であつた。彼には死も猶侵す事の出来ぬ生がある。故に死は彼を囚ふる事が出来なかつたのである。かく彼は常に不滅である。

凡て生には法がある、靈の法に従ふ者は靈の生命を有ち、肉の法を守るものは健康をもつ。肉の生命には死がある、靈の生命に死はない。けれども凡ての人は必ずしも永生を望むものではない。彼等は寧ろ長く生んことを願ふ、長く生きるのは決して永生ではない、何となれば、永生は靈の生命であつて肉の生命の連続ではないからである。靈の生命であるから肉の生命のやうに死することがない。故に永生と云ふのである。

さらば斯の如き生活を未來に於て要求する人は、それが未來に於て生甲斐のある生である

やうに現在地上の生活に於ても生甲斐のあるものであることを認めねばならぬ。もしも後世に於て之を有つ事を願ふ者は、此世に於ても之を有つ事を願はねばならぬ。我等は果して之を求め之を願ふか、飢ゑ渴く如く義を慕ふ者は福なり、其人は飽くことを得べければなり。我等は果して義に飢ゑ渴ひて居るか、信仰に徳を加へ徳に智識を加へ智識に樽節を加へ樽節に忍耐を加へ忍耐に敬虔を加へ敬虔に兄弟の睦を加へ兄弟の睦に愛を加ふべし。これ實に聖書に教へられたる、加への法である。我等は眞にかく加へつつあるか、家に土地を加へ、土地に家財を加へ家財に奢侈を加へ奢侈に株と公債を加へ株と公債に社會的位置を加ふるは、世の人の欲する加への法である。我等は此法に従つて加へつつあるのではないか、使徒パウロは、耐へ忍びて善を行ひ榮と尊貴と限りなきとを求むる者には永生を與へ給ふと云つた。

さらば世と妥協して邪を行ひ富き位置と譽を求むる者は何を得るであらう、我儕が顧みる所は見る所の者に非ず見ざる所のもの也蓋見る所の者は暫時にして見ざる所の者は永遠ければなりと聖書は教へる。さらばたえず見ゆべきもの一時のもののみを求めてどうして見るべからざる永^{かぎりな}遠きものを望むと云ふことが出来ようか、不滅の信は即ち見えざる所の者を顧みることである、説明により達した結論でなく、常に行ふ心の習慣である。

世には往々にして意氣揚々、自得せる紳士淑女にして、不幸、子を失ひ妻を亡ひ母に別れ夫に遺されて生のはかなさを感じ、空しき夢より醒めたるものの如く、誠に求むべくより優される何物かを欲して、俄に如何なる書を讀むで光明を得、如何なる言を聞きて慰藉を得べきか、然して靈魂の不滅は何により證明すべきかと尋ねる人がある。幾何の問題は黒板で説

明する、けれども永生の問題は説明の限りである。音楽の趣味なき人にどうしてビートルズの靈味がわからうか、何事も事實が先であつて説明は後である。星があつて而して後に天文學がある、花があつて、而して後に植物學がある。言語があつて文法がある。宗教があつて神學がある。さらば我等は先づ生活せねばならぬ、而して始めて永生の何たるを説明することが出来る。生命の木の實を食ひたい人は先づ生命の木のあることを信ずる。生命の樹のあることを信ずる人は先づ此世から此を探がす。今在す神に之を聞く、而して神が我らに開らき給ふ道をす、むで生命の木に達する外はないのである。

若し我等が現在此世にて不滅の生活をなし、たとへば其信仰の如くならずして死して後何等の生活を見出すことが出来なかつたにしても、我等は不滅の生活を送つたのをよるこばれ

ばならぬ。死すべき肉の獸的生活を送つて永く活るよりは優れりである。永生の資格なくして無限なるよりは、寧ろ永生の資格であつて有限である方が優れりと思ふ。はてしなく價値なき生涯を送るより恐しい事はない。恰もさまよへる猶太人のやうに生甲斐のある何等のものもなくして、生を貪ぼりつつ、國より國に逐はれ行きて、何の楽しみがあらう何の光榮があらう。若し人生に信望愛の三がなかつたら人世は住むにたへない落莫たる荒野である、さらば生命の樹より生命の實をとらんさ欲する者は、先づ其實をとり得る資格を求めねばならぬ、今後の生涯に於て合理的なる希望を得んと思ふ者は、現在の生涯に於て不滅の生を有たればならぬ、而して靈魂の不滅を信ぜんと願ふ者は先づ之を行はねばならぬ。

繪 解

新約聖書を見ると、死が様々に畫かれてゐる。もとより線と色とて畫いたのでなく、文字と信仰を以て描うつされたのである。勿論裝飾でなく、天來の啓示である。其所にある四つの死の繪は、何れも著者の信仰と實驗を反映してゐる。

第一、死は眠なりと畫かれてゐる。

死は眠であると、希伯來の詩人は歌つたが、新約聖書にも同じ言で形容せられてゐる。即

ち「ラザロは眠れり」とか、「彼女は死せるに非ず眠れるなり」とか、或は又、ステパノ石に打殺される時、「此言をいひ畢つて彼寢に就く」とある。

小供がある、一日の活動に疲れ、玩具を抱いてすはつてゐる、彼の影は夕日に射られて長く草庭に横はつてゐる、かゝる時如何にすべきか最も賢き道を知れるの母は、戸口に立ち出で、彼を呼んでゐる、我子よ歸れと。彼は己を呼ぶ母の聲に不精無性にふり返へり、まだ外にゐて遊びたいと云ふのである。戯の面白さに名残を惜しむのである、けれども彼はを懐き、彼をゆすつて眠らしめる、又明日の樂しき活動の爲めに備をなさんとて、愉快な新らたな晨を彼に與へんとて。

死は恰も、かくの如く、基督は戸口に立ち出で、云ひ給ふ、子等よ汝の一日の勞苦終れり

汝の遊はすめり、黄昏となりたれば、早く來れ、我れ汝に安き眠を與ふべしと、かく抱き給ふ主の御聲を聞きて、我等は不精無性に答へつゝ、泣きつゝ墓に來る、その寢床にて彼は其愛する者に安き眠を與へ給ふ。

第二、死は解放である。

變貌山上にて、モーセとエリヤが現はれて基督が將にエルサレムにて受けんとする解放に就て物語つたと云ひ傳へられてゐる。

死は即ち奴隸の國より自由の國へと出行くことである。解放である。イスラエルの子等はゴセンの地に住つて居た、食ふに糧あり、纏ふに衣あり、住ふに家あり。けれども彼等は奴隸であつた、モーセ來つて彼等と呼びし時、彼等は彼に従ふこゝさを躊躇した、彼等は紅海を渡

らねばならぬことを恐れた、永き荒野の旅路を憂ひた。約束の地に至るにはこの苦き経験を嘗めねばならぬことを悲しむたのである。けれども此が即ち解放であり解脱である。我等は今このゴセンの地にて再び囚へられ肉の束縛を受けつゝあるのであつて、一人として其身の束縛を嘆かざる者はあるまい、時として籠の鳥が遁れ出んともがく思ふそのまゝに、我身に覺ゆることがあるであらう。死は即ちモーセが其同胞を呼ぶ聲である。汝等は最早奴隸にあらず、又鎖につながるべき者でない、見よ自由の天地汝等の前に横ばるにあらすやと、死は即ち解放であり解脱である。

第三、死は即ち進水である。

わが進水の時は近づけりとバサロは云つた、船は船渠につながれて仕上をまつてゐる、大

工等は尙髓をもち鋸をもちて、あちらにこちらに忙しく働いて居る。之れ即ち人生である、人は猶ほ未成品である、造られつつある、我等は猶ドックにつながれてゐる、鋸でひかれ、鏈で打たれ、様々の鍛錬を受ける、殆其試練に耐へ得ざる迄に。けれどもこの遅々たり徐々たる方法にて、人は造られつつある。而して時が来る、神はよしと見給ふ時にその熱き網をきつて放ち給ふ。船は船渠をすべつて、未知の海へと浮ぶ、船はもさより海を知らぬ、けれども船の爲めに海を備へ給ふ神は之を知り給ふのである。

ガティ夫人の著、自然の譬に、かふ云ふ話がある。

蜻蛉の幼蟲が水の中に居た、彼はこの水の外に不思議な世界があるらしいと思つた。そしていつも其世界がどんな世界でどんなものがあるだらうかと何とはなしにその世界を戀しが

つて居た、兎角するうちに日數が立つて彼は段々發育して最早それほどの準備が出来、彌々外の世界へ旅立つ時となつた。彼はうれしさにいそ／＼しながら他の仲間にも別を告げて、若しもほんとうに噂のやうに此水の世界以外に他の世界が在るのであれば、必ず歸り來つて知らせると約束して、土堤傳ひに上つていつた。彌々日の光照る水の表に出た、虫は殻を破つて水面を遊び廻つた、ふはり／＼と池の面を。外の世界は確かだとわかつたが、さて約束の通り此事を昔の友に報告せなければならぬと思つて、いくら家路をさがしてもつひみつからなかつたと云ふのである。

死は即ち進水である、かくて我等は眞に我等の住ふべき世界に遷るのである。

最後に死は故郷に歸ることである。

われ汝等の爲めに所を備へに往くとは、キリストの言である。死は我等を未知の海に帆走らしめる、海は正しく未知の海である。けれども異郷に往くのではない、此世の生活こそ假の世とも云はゞ云へ寄寓とも云はゞ云へる、けれども彼世は永住の家郷である。

アイルランドの賤が伏家を立ち出で、我も彼もと米國と云ふ黄金國へ移住する、先づ息子が往く、次に娘が往く、遂には父も母も、彌々出發さ云ふ時には住みなれし山川草木。過去の思出に別を惜しむ、未來の取越苦勞に心を痛める。そして窮屈な下等船客として、數日の航海を續ける。然れども航海既に終つて船を下り、棧橋に出づれば、其處には子女が相携へてよるこび迎へて居る、異郷へ移住するつもりでアイルランドをあとしたが、彌々米國に着いてかく子供に取まかれて見ると此國が即ち彼等が永住すべき地、彼等の國、家庭も亦こゝに

あるのだと考へずには居られない。かくの如く、我等は先だてる友を送り、兄弟を送り姉妹を送り、子や妻や夫や親を送つた、而して我等自身も彌々出發の時が来る、神の召を蒙る時が来る。たとへ、初めての舟初めての航海であつても、我等の行く國には多くの愛する者等が我等を待つて居る、此處に眠つて彼處に醒むる時親子夫婦兄弟朋友相會し相懐しむの時、其變遷の突如たるに驚くこともあらう。

さらば何も死を懼るゝ事はない、恰も降誕節の時、父親がサンタ爺となつて贈物を抱へて部屋に来ると、子供はそれとは知らず、こわい不思議な人が來たと叫びながら驚きにげる。そのやうに、死は變裝した基督である。賜物を両手に抱へて來り給ふのである。勞れたるものに安息を與へ、囚へられたるものに自由を與へ、不完全なるものに成就を與へ、さまよひの

身に歸省を與へ給ふのである。鎌を持ち沙時計を有つた死の畫は異教的觀念である。手に十字をもち、口に笑をたゞへ、照り輝やける彼は招き給ふ。爾曹勞れたる者又重荷を負へる者は我に來れ、我れ爾曹に安息を與へ生命を與ふべしと。

附

錄

神の人モーセの死

天地の本體は無常であるを、アリストテレスは叫び、世は去り世は來る地は永久に保つたりと、ソロモンは悟り、行く川の流ればたえずして、しかも、もとの水にあらず。流れに浮ぶ水泡は且つ消え、且つ結びて、暫くも止まることなし。世の中に住む人とすみ家と又かくの如し。と鴨長明は觀じた。人世は果してかくもはかなきものか。隣邦の文豪蘇東坡も亦船を赤壁の下に浮べて、昔此赤壁の下、湖水の上、曹操と云ふ豪傑が魏の大軍を率ゐて呉の兵と戦つたことがある。頗る大膽な男で呉の軍勢を前にひかへながら、眼中あだかも一兵卒なきが如く、戈を横へて詩を賦つたと云ふ。是れ實に一世の雄である。然るに彼今や何處、洞庭は徒らに波靜にして、又昔日の面影をさめないと云つて人世の無常を嘆じた。誰しも常識の眼や、冷かなる理性で此天地間の事物を觀するならば、生者必滅の理を尤ださうなづかぬ

わけに行かぬ。無常を觀するは、昔に鴨長明や蘇東坡やソロモンやアリストテレスのみではない。常識や理性を以てのみ此世を觀する時には、必ず生を有する者の終局は死である。さ云ふ結論に到達するに相違ない。果して此が眞理であるとすれば、人世は確に一大非劇である。假令其人の生涯が如何に富貴であるにしても、成功であるにしても、幸福であるにしても、其終局が死であるさすれば、富貴何者ぞ、功名何者ぞ、幸福も亦何者ぞ、一生は夢の如くに破れ泡の如くに消ゆ、生は樂しみしことの深ければ深い程、大なれば大なる程、死の悲しみは深く、死の苦しみは大であらう。然らば人の一生は死の呪ひに向つて進みつゝあるのである。最大の樂を此世に有する者は、最大の呪を受くべき者である。然らば此世の樂みも亦樂しみでなく、却て呪である禍であると云はねばならぬ。死の苦痛であるが如く生も亦苦痛で

ある。然り生も死も苦痛であり悲哀である。信仰を有せずして只理性のみを重んずる者は、到底人世を悲觀せずにはをられない。

けれども信仰ある者は決して人世を悲觀せない。何んとなれば父なる神が人を此世に生じ給ふさすれば、生の終局が死であるさ云ふこと位、神の親心に矛盾することはないからである。親は其子が生命に充ち元氣に満ちて其生涯が榮え榮えて永遠ならんことを欲する者である。然らば此親心を生物に與へ給ひし神は必ずや小兒の一人だに亡びるを悲しみ給ふに相違ない。かく親心の親心なる神が全智全能に在します以上は、生の終局は生であつて死ではない。所謂死なるものは生の終りではなくて第二の生の始りである。之を譬ふれば生は船であり、人生は海である。人は生の船に乗じて人世の海原を渡るのである。船の進むに従つて遂に

は死と稱する海峡に達するのである。遠くより之を望めば、恰山又山相重なりて前途を遮ぎるが如くに見える。船中の人は驚き懼れて云ふ、我等は何の目的をも達せざるに我等の航海は終を告げんさす。さてもはかなき人生よ、さらばさらば、妻よ、子よ、兄よ、弟よ、父よ、母よ、我等の愛こそ今はの際の恨みなれ。さ船は彌々陸地に向つて進めば不思議なり、陸地にあらすして海峡である。其海峡を出づれば見よ、新たなる海あり、杳渺として際涯なく緑なる島影、點々たる白帆、何等の絶景ぞ、理性をたのみ智慧を誇る者の愚かさよ、彼等は死を以て生の終り也と云ふ。されど死は海峡である、第二の海に入るの門である、新たなる生の始である。ア、不思議の生よ、我等はいつ又何處の港よりか生の船には乗れる、知らず！知らず！知るものは只我等の爲に生の船をあやつる船長のみである。然り神のみである。神は我等が生

の船を進めて死の海峡を通らしめ給ふ。是實に生あるものゝ一度は必ず受ねばならぬバプテスマである。數多き人の中には、功成り名遂げて後に死の海峡に入る人もあるであらう。然し又出師いまだ勝たず、志いまだ達せざるに、身まづ死する人もあるであらう。神の人モーセの死は前者に屬せずして寧ろ後者の類である。思ふに彼がホレブ山上に於て一身を捧げ同胞を救はんと志を立ててより實に四十年、其間たえずイスラエル人の罪も憂も己が一身に引き受て、辛苦艱難の後漸くアラビヤ半島を横ぎつて、ヨルダン川の東モアブ人の地に着いた。ヨルダンを渡れば向うはエリコの沃野である、カナンの地である、彼が六十万の同胞と共に夢に現に忘るゝ能はざりし神の約束の地である。彼の血は湧き彼の胸は躍つたであらう。彼は神の命に應じて、ピスガの山の頂へと上つた。たゞ一人然り唯一人！ 見渡せば棕櫚の町

は眼下に、カルメルの山は海に臨んで遠く、エスドライロンの沃野は緑した、リ、セチムの谷は橄欖の香りゆかしく、昔アブラハムが乳と蜜との流るゝ地と歌ひし、神の祝福の地はダンよりベエルセバに至る迄一目の内に見ることが出来る。彼の同胞はヨルダンを渡つて此祝福の地を嗣がんに進むであらう。けれども彼は獨り、此ヒスガの山の頂に其屍を曝されればならぬ。神は彼に向つて人の子よ汝は塵に歸るべし。ま命じ給ふのである。信仰の人ならざりせば誰れか、斯かる憂ひに耐へよう、彼は黙して口を開かず唯神の御旨のまゝに安んじた。彼はかゝる場合に於ても、神が彼を守り彼をよきに導き給ふことを疑はぬ。

人あり愛する嬰兒の石碑に哀傷の情をしるす。其歌に曰く、

誰れか此花を摘みしやと、園丁の聲はふるへぬ。

友よ、之を爲し給ひしは主なり。との答に、彼はたゞ黙して何言をも云ふ能はざりき。

然り、我も亦黙して口を開かざるべし。何さなれば、主よ、汝、我子をさり給へばなり。思ふにモーセが召を受けし時の心事も亦これと同じであらう。さるにても、彼は何が故にかゝる悲惨なる最後を遂げばならぬか、何が故にイスラエルと共に苦を分ちし彼は、イスラエルと共に樂をも分つ能はざるか、何が故に神に最も忠實なりしモーセはモアブ人の地に葬られればならぬか、何故にたえず神に背きたりしイスラエルは無事に、ヨルダン川を渡りて幸なる生を樂しむのであらうか。

嘗てモーセ、イスラエルを率ゐてシンの荒野がテシの地に至れる時、イスラエル人は水に窮して不平を神に訴へたることがある。其時モーセは神に祈り、杖を上げて岩を打つこと二

度、岩自ら水を出して人畜の渴をとむることを得たり。後世此水を呼んで、メリバの水と云ふ。メリバとは争論の意である。イスラエルの不信心より發する、恨み、憤り、はては、争ひの聲が如何に激甚なりしかを察する事が出来る。之が原因となつて、神はモーセの死を宣告し給ふたのである。モーセ豈、神に對して罪を犯さんや、罪を犯したるは彼、同胞である。モーセはたさへ、飲む可き一滴の水すら與へられずとも、たとへ渴きて死する事ありとも、彼は決して何等神に對して不平を抱く程不信心をもたぬ。然るに神は罪なきモーセを罰して罪あるイスラエルをゆるし給ふたのである。罪なきモーセにして天罰をまぬかれずとすれば、罪あるイスラエルは猶更大なる天罰を蒙らねばならぬ。然るに罪なきモーセは罪ありさせられて死に定められた。彼はイスラエルの罪を己が一身に引受けたのである。イスラエルの罪

は彼の罪である。彼によりてイスラエルの罪は贖れたのである。イスラエルの救はれんが爲めには、たとへ死に至るも彼は辭せなんだのである。あたかも、我等の主基督が我等を救ふが爲めには十字架の死をさへ敢てし給ふたのと同じである。神は常に強きものを弱きものゝ爲めに、高きものを低きものゝ爲めに、聖きものを罪に汚れたるものの爲に、犠牲となし給ふのである。此犠牲は實に神の御救の形である方式である。モーセの死は實にイスラエルを救ふ爲めの犠牲の死であつた。キリストがカルヴァリーの岡にて、十字架にかゝり給ひし様に、彼はピスガの高嶺にて祈り死したのである。勿論彼の目的は未だ決して成就したのではない。けれども彼は神必らず彼の爲めに之を成就し給ふことを信じた。人或は彼の生涯を以て失敗なりと云ふ者あらん。されど彼は彼の生涯を以て成功の生涯と云ふのべ、ある。何と

なれば成功とは神の御旨に服従することであるからである。全能なる神の御旨に成らざるなし。故に神の御旨に服従することは必らず成功である。偉人モーセは神の國を望みつゝ此の世を去つた。享年百廿歳。その目は朦朧す、その氣力は衰へなかつた。彼は老衰の極、何等爲すなき無用の形骸となつて死したのではない。然かも彼の遺骸は罪深き人の手によりて葬られたるにあらずして、神自ら之を葬り給ふたのである。今日に至る迄その墓を知る人なしア。是れ何等の恩寵ぞや。彼は神の御手に導かれて死の海峡を過ぎた。彼あに死すべきものならんや。

聖靈の歌

三 なんぢら風に習へる舊人即ち人を惑はす慾の爲に壞
らるゝ者を脱ぎ 二三 また爾曹の心の靈を新にし 二四 神
に象りて眞理の義と潔にて造れる新人を衣るべし 二五
斯て謊言を去ておのゝ其隣に眞を言ふべし蓋われら
互に肢なればなり 二六 怒て罪を犯すこと勿れ怒て日の
入るまでに至ること勿れ……三〇 神の聖靈をして憂
しむること勿れ爾曹救を得る日の爲めに彼の印を受し
者なり (エペソ書四章二十二節——三十節)

デ、クキンシーと云ふ文豪がこんな夢を見た。或る大きな會堂の後に墓地がある。其處には
多くの有名な英雄や王侯の石塔がある。天使の翼を揚げた神々しき石像や、喇叭を握つた
まゝ戰場に斃れた勇士の銅像などがある。そのなかを一筋の途が通じてゐる。ふと向ふを
見ると一人の可愛い子供が一輪の花を見つめて立つてゐる。然るに、何處よりとも不知、一輛
の戦車が非常な音響をたて、疾風の如くに飛んで來た。車は子供をめがけて轟地！危機一
髪あはや子供は一轍と云ふ其刹那、不思議や銅像の勇士が跳起て警笛を吹きならし、石像の
天使は手をのばして子供を抱き上げたと云ふので夢は破れた。何んと意味深き暗示に富んだ
夢ではないか。多くの場合に於て、人はこの子供のやうに一輪の花に心を奪はれてゐる。人の
心を魅する其花とは、人生の榮華か、幸運の輝か、成功の得意か、或は又相思ふ人の心が、

何れにせよ生の旅路には多くの花がある。我を忘れしむる迄に其花の色香は麗はしい。人は其花に魅せられて戦車の迫り来るをも知らぬ。死の車か、失敗の車か、破滅の車か、危険か、恥辱か、何れにもあれ懼るべき暗黒な詛の力が迫つて来る。罪の價の勘定書が来る。この懼るべき火の車が思はぬ時に人を襲ふを見て、親も奈何ともする能はず、朋友も奈何ともする能はず、人力の到底及び難き其の時、銅像もじつとして居れず、石像も傍觀することが出来ない其非常の時、神は如何に十全の親心を傷ましめ給ふであらう。これ實に神の聖靈をして憂しむる勿れ、と使徒パウロが叫んだ所以である。

有名な宗教畫に、或青年が惡魔と將棋を戦してをる。相手は惡魔である。無論青年はそれが惡魔であるとは考へて居ない。唯勝たう取らうの一點張で目前の懸引にのみ忙しい。惡魔は

名譽の駒を放つて誘ひ、或は成功富貴の罫をかけ、手を更へ品を變へ、祕術を盡してをる。青年はつまらぬ駒をとつて大満悦、勝利は自分のものと信じてをるらしい。何ぞ知らん、敵は既に彼の善行の駒を奪ひ更に又祈禱の駒を屠り、將に一舉にして本壘を抜かんとする所である。然るに青年の背後に立てる天使は、青年の不謹慎なる一舉一動を視守つて、前途如何になり行くかを思ひ憂ふるに耐へず、彼は翼を伸ばし、天を仰ぎ、早くも其青年を兩手に捉へて遁れんとしつゝある。彼は正しく其青年の守護天使である。其青年を滅亡より救はんが爲めに争つてゐるのである。

人世の實況を寫し神の愛を畫くと、この繪の如きは罕である。視る者をして慄然襟を正うして悔悟の涙を注がしめる。實に、人の一生は將棋を敵すが如くである。人やゝもすれば目

前の利益にのみ心を奪はれ、永遠の勝敗を念頭におかず、遂に一生を失敗に終る。取らうと思つて實は取られ、勝たう勝たうとあせつて實は負ける。これ決してウキルヘルム二世一人の身の上ではない。目前を急いで善行の駒を失はば、其時汝の道徳的生命を注意せよ。成功をあせつて祈禱の精神ゆるみなば其時汝の信仰的生命を看視せよ。汝の失敗は唯決して汝一人の失敗に止まらずして、汝の家族の失敗であり、汝の朋友の失敗である。其禍の波は人に及び神に至る。神の聖靈をして憂しむる勿れ。小子の一人だに亡ぶるは天父の聖旨にあらず。(馬太傳十八章十四節参照) 神の親心は天使となつて我等を守護し給ふ。人の眼にはよし天使の御姿は見えなくとも、不完全な人間の親心ですら、其愛する者をつかの間も離れる事はない。どうして神の完全なる親心が我等と共にあらぬとが出来ようか。ハムバルグの或教會の戸に

使徒ヨハネの像が彫まれてある。彼は大理石の椅子に腰かけ、手にペンをもち、膝の上にひるげたる羊皮紙に何ものか書つゝある。何れ黙示録であらう。彼の背後に天使が立つて彼の手を動かしてゐる。たとへ彼の眼に天使を見なんだにしても、彼は聖靈の黙示を信じてゐる。故に黙示録を書いたのは、彼ではなく聖靈である。彼に靈智靈能を與へて、地の事を知るが如く、天の事を悟らしめし神の靈である。神の靈は天地創造の始めより、母鶏の卵を孵すが如く萬物を覆ひ、萬物之によりて生じ、之によりて進化するのである。人はこの靈を呼吸して始めて生き、この靈にみだされて始めて聖く、この靈に導かれて地の榮光より天の榮光に達するのである。神の靈は天使となりて其の姿を現し、幽玄の聖旨を人體に傳へ、イエス・キリストとなりて我等と共に住ひ、我等を救はんが爲めに十字架の苦難を敢てし、甦りて神の榮光

に入り、救世の使命を成就し給ふ。聖靈と云ひ天使と呼び基督と稱ふるも、要するに愛するものを離れ難き父なる神の親心である。パウロは云つた、『聖靈も亦われらの荏弱を助く我等は祈るべき所を知らざれど聖靈自ら言ひがたきの慨歎を以て我儕の爲めに祈りぬ』と、人の歩みの滅亡に走る時、心の足の道に躓つく時、靈の姿の罪に汚れる時、精神の生命の死に類する時、火の車が思はぬ所より迫り來る時、人は徒らに一輪の花に憧れて祈るべき所を知らざる時、其人の爲めに、其人の救の爲めに、言ひ難き慨歎をもちて祈り給ふ基督がある。彼は日も夜もたえず、我等の爲めに涙をそそぎ給ふ。

或所にKと云ふ人が居た。其父親が非常な大酒家で、いつも酔狂する癖があつた。子供心にも酒が如何に家庭の平和を破る恐ろしい力であるかを思つて、何とかして父親を禁酒せしめ

ようと苦心した。其後東京に出て、銀座教會で受洗して様々に父親を諫めたけれ共父親は益々反抗するのみであつた。間もなく志を立て、遠く米國に留學した。多年の間學業にも勉しんで居たが、或時書を父親に送つて妻帯の相談をしたが、何の返事もない。やゝ暫くたつて母親の書狀が來た。轟く胸を押へて封押し切つて讀んで見ると、豈に計らんや、父親はお前をば子とは思はないから勝手にするがよい、と云ふのであつた。此時Kは未だ嘗て經驗した事のない失望に陥つた。是迄苦學したのも親あればこそ、然るに自分を子と思つて呉る親はなくなつた。世の中には何の望も樂もないと、それから全く自暴自棄して遂に支那博奕に身もちくづした。可なりの収入があるけれども、貯めればためる程、博奕に費して仕舞ふ、彼の朋友等も如何計り彼に忠告したかわからない。けれども彼は止めようともせない。何等將來

の事も考へずに、十年を空しく過した。然るに一昨年クリスマス頃であつた。彼の一生に大變化を來す事件が起つて、それが爲に彼はすっかり悔悟して別人間を生まれ更つた。其事件とは外でない。其頃彼の知人でフランスノ市で或家庭に十年の間辛抱した人がある。或日主人が呼んで云ふやうには、お前も十年の間よく働いて呉れた。定めし澤山の貯金も出來た事であらう、それが何千ドルであつても二倍にしてやらう。自分が其三分の二、家内が三分の一を出す、夫で日本に歸て妻を迎へて來いと云つた。然るに某は一錢の貯もないので非常に赤面してありのまゝに告げると主人はがっかりと失望した。其失望を云つたらない、こんな氣の毒な思ひをしたとはないさKに物語つた。然るにKも亦其後主人に呼ばれた。主人の云ふ様には、お前は十年の間よく働いて呉れた。定めし多くの貯金も出來たであらうが、今後は月給

も増すことにするから妻帯をせよ。と親切にすゝめるのであつた。Kは自分の爲にこんな親切に思つて呉れるかと考へると、自分のこれ迄のものが取りかへものつかぬ失策であつたと氣がついた。それ以來はすっかり眞面目になつて、再び教會の門をくぐるやうになつた。自分の爲を思つて呉れる人の親切を見出したことが、其人の生涯を一轉する不思議の力である。それならば、人の親切にまして我等に注がれる、神の愛基督の愛が、わかつた時どうして悔い改めずになられよう。我等の爲に幾十年の間、日も夜も涙を流して祈り給ふ基督の愛を思はねばならぬ。我等の額には主が十字架の血しほをもてしるし給ふた聖名がある。我等は主の再現の日に救はるべきものである。神の聖靈をして憂しむる勿れ。と云ふ言葉の意味が了解せられる時、誰か、舊人即ち慾の爲めに壞るゝものを衣の如くに脱ぎすて、心の靈を新たに

して、基督エスの榮光を現さうと、つまめぬものがあらうか。あゝ神の御姿よ、新人よ。

人もし新に生れずば

イエス答て曰けるは誠に實に爾に告ん人も
し新に生れずば神の國を見ること能はじ

(ヨハネ傳三章三節)

イエス答けるは誠に實に汝に告ん人は水と
靈とによりて生れずば神の國に入ることは
能はざるなり

(同 五 節)

メソヂスト派の開祖ジョン・ウエースレーと相携へて、宗教史上に異彩を放つたホイット
フキールドが、其友ベンジャミン・フランクリンに送つた手紙に、

僕が學者として君の名聲が益々高くなるのを祝すると同時に、君に勧めたいとは君が學
術に熱中するその熱心を以て、神祕なる再生の眞意義を研究せられんことである。僕は學
問の内で最も必要な學問は、實にこの再生の學であると信ずる。君がもし其眞理を會得
することが出来たならば、君は決してそれが徒勞でなかつたのをよるこぶであらう。敢
て言ふ。我が愛する友よ、人は新に生れなければ神の國を見る事が出来ない。と云ふ
最も嚴かな主イエスの御言葉を記憶せられよ。僕等は遅かれ早かれ、主の臺前おんまへに立つの
日が来る……………

讀者諸君はこの書狀を讀んで、如何なる感じがありますか。ホイットフィールドはフランクリンの勧めたやうに、同じく私共に、再生の眞理を會得するやうに、叫んでゐるとは思はれませんか。彼がもし今此所に現はれて眞先に何を言ふかと云へば、彼は必らず、

我が友なる實業家よ、政治家よ、教育家よ、宗教家よ、汝の名は上り、汝の志は達しつゝある。是實に祝すべきことである。けれども諸君の先づ知り、先づ行はなければならぬことは、再生の眞理である。私共はいつ主の臺前に立つかを知らぬものである。もし其備がなく覺悟がなかつたならば、思はざるの時、知らざるの日に、突如として主の召をうけた時、何等後悔することはありますまいか。其時は諸君の一生をかけて貯へたる富も、諸君を救ふ能はず、智識も諸君を慰むる能はず、友愛も亦何等の力をもたくなりませう。人は新

に生れなければ神の國を見ることは出来ません。と叫ぶでせう。

新に生れるとは、實に意味深き神祕的な教です。基督がパリサイの師、猶太人の宰なるニコデモに向つて此言を發せられた時、流石の彼も之を理解することが出来ませんでした。彼は立派な政治家であり、堂々たる學者であり、又信仰に秀でたる徳望家であつた。彼こそは最も神の國を見、神の國を解し、神の國に住へる一人である、自らも信じ、又人も信じたでせう。然るに基督は彼の如き智徳備はれる人物に向つて、新に生れよと云ひ給ふのです。彼が其の言を理解することの出来ないのも無理はありません。信仰があります。それでも生れ更る必要があるでせうか。聖書の教に通じて居ます、それでも神の國を見ることは出来ないでせうか。道念堅固です。それでも神の國に入つたとは云へないでせうか。諸君はどうお

考になりますか。ニコデモのやうに、人早や老いぬれば再び母の胎内に入りて生るべけんや。と答へたくはありませんか。常識から申しますと假令年のゆかぬ若い人であつても、生れなほすと云ふことは出来ません。若しも何事であれ、常識を以て判断し、理智を以て解釋すべきものとすれば、誰でも基督の再生の教を信するものはありますまい。けれども宗教上の眞理は必ずしも理智を以て説明し得べきものでなく、寧ろ實驗によりて證明すべきものであります。

或時一團の青年が笑ひ興じつゝ道を歩いて居ました。談たま／＼宗教のことに及ぶ一人の青年が、僕等は理智の批判を信する。理智によりて了解が出来れば之を信じ、出来なければ信ぜない迄である。苟しくも理智に背くやうな傳説や教理に至りては如何に貴きもので

あつても之を信するは自ら偽るのである。と申しますと、通り合せた一人の老人が申しますには、成程諸君の云はるゝ所は御尤です。私も理性を貴びます。理性は光です。神の與へ賜ふた闇路の光でせう。それで人は理智を缺く時は一生が暗黒になります。然れども私共の手にもつ提灯のやうなもので、それで千里の道を照すわけには行きません。其光の照すのは僅かに前後數尺ではありませんか。さすれば光の照らす所許り道と信じ、光の及ばざる所を道にあらずと云はゞ、諸君は其道が果して目的の地に達するや否やをどうして知ることが出来ますか。それを知らなければ、それが道であると信することも出来ずまい。道であると信じられなかつたら、どうして其道に進むことが出来ますか。たゞへそれが夜でなく晝であるとしても、諸君の見る所の道は僅に諸君の視線の達する範圍でせう。然るに道は其範圍を越

えて遙かに遠いのです。諸君は見る所を信ずると云ふより、寧ろ見ざる所のものを信じつゝあるではないか。知る所を信ずると云ふより、寧ろ知る能はざる處の事を信じつゝあるではないか。と、老人は路傍の牧場を顧みて申しました。諸君あの牧場を御覽、牛が居ます。豚が居ます。鳥も居ます。皆同じ牧場の草を食つて居ます。然るにどうです、その同じ草を豚が食へばあのやうな荒毛となり、鳥が食へば羽毛となり、羊が食へば綿のやうな純白な毛となります。諸君は其理由を説明することが出来ますか、出来ますまい。けれどもたとへ、智識を以て説明する事の出来ないにしても、それが事實である以上は信ぜぬわけには行きますまい。宗教上の眞理もそれと同じく實驗し經驗せる事實であるから之を信ずるのです。と云つたと云ふことであります。ニコデモが之を信ぜなんだ時に。基督が、我れ地のことを云ふに爾曹信ぜ

ずば、況して天の事を言はんには何で信ずるとをせんや。と仰せられました。新に生れることは基督御自身が地上の生涯に於て經驗された事であります。それすら理解することが出来ないやうでは、どうして更に高き靈界の消息を信ずることが出来ようかと申されたのです。使徒パウロが、

そは人の情は其内にある靈の外に誰か之を知らんや此の如く神の情は神の靈の外に知るものなし。

(哥前二ノ十一)

と申しましたのは、矢張靈界の眞理は神智靈覺によりて、體得せらるべきものであると云ふのでせう。再生の教の如きは即ちそれです。之を最もよく證明するのは、ジョン・ウエースルの生涯です。彼は千七百二十七年には、一小村落をも動かすことの出来ぬ、憐れな説教者であ

りましたが千七百三十九年後の彼は實に天下を席卷する程の勢さになりました。嘗ては小殖民地から退出されるやうな説教家が、やがては無數の人に歸依渴仰せらるゝ教師たり、慰安者たり、先覺者たることが出来たのは何故でせう、それは決して彼の肉體や智能に特殊な變化があつたではありません。又彼の説教術が大變化を來したと云ふものではありません。ルー
トに於ける彼は廿五歳の青年牧師で、學者的頭腦と熱心家の火と雄辯家の舌を具備して居たのです。けれども彼の傳道はすつかり失敗しました。彼は其時の事を、

私は多く説教したけれども其努力は何等の良き實を結ばなんだ。

と日記に誌して居ます。又彼がチャールレストンで傳道したのは三十二歳の時です。恐らくは此時程熱烈に傳道したことはありません。多年の経験により説教も上達し、教會上の心得

も出来た。加之、彼は全く己をすてゝ働きましたが、此所でも矢張失敗しました。けれども彼が三十六歳の時彼の生涯に大變化が來しました。彼は此の時始めて新に生れ出たのです。彼は今迄自覺することの出来なんだ神の國を見る事が出来ました。而して進んで神の國に入りました。爾來彼の傳道は世界を教區として着々功を奏しました。ウエイスレーにこの新に生れる経験がなかつたら、彼は徒に彼の明晰なる頭腦と、熱烈なる感情と、而して堂々たる雄辯とを抱いて、失敗の生涯を送つたでせう。新に生れるのは何の爲めか、勿論それは神の國を見るが爲めです。新に生れなければ神の國を見る事が出来まいと云ふのは、肉の人として生れ出で、始めて物質の世界を見るやうに、更に新に生れ出で、始めて神の國を見る事が出来る経験をそのまゝに云ひ現はしたものでせう。有名な説教家のスボルジョン

は此の聖句に基いて、人は一度生れて二度死し、二度生れて一度死するのだと申しました。たゞ肉の人として生れた丈で、新に生れることがなかつたら、肉の人として第一の死をなめ、やがては其人の靈も亦永生に入る能はずして亡びるのであるから、一度生れて二度死するのです。然るに肉の人として生れ、更に又神の子として生れたるものは、たとへその肉體は死しても其靈は永遠に生活するのです。それで再び死せずと云つたのでせう。然らば新に生れて始めて見るこゝの出来る天國とは果して如何なるものでせう。私は此迄私の信じて居た神の國と云ふ觀念が、頗る皮相淺薄なものだと覺りました。勿論此迄とても死後の存在を信じ甦を信じて居ましたが、永生即ち神の國の生活を、單に道德的な精神生活であると考へたのが、神の國を見る事が出来なかつた何よりの證據だと思ひます。肉の生命が限りある生

命である様に、靈の生命は限りなき生命である。靈の生命は道に叶つた道德的の生活である。故に神の心に叶ふ生涯を送ればそれが永生であると信じて居ました。果してさうであるならば、私共の永生は浮沈極りなきもので、時ありては神の心に叶うて永生を送り、時ありては神の聖旨に背いて永生を失ふのです。何んと定めなきはかなき永生ではありませんか。それで私共の生活が矢張永生と云へませうか、果して然らば永生とは水に溺れる人の浮き沈みするが如きものです。私はそれを生命と云ふことは出来ないと思ひます。それは死の蔭につままれた生命です。憐むべき生命です。私はかくの如き永生は楽しむに足りないものと思ひます。少くとも永生とは、死も猶亡ぼすことの出来ない溺れるものない世に勝ち肉に勝てる生活でなければなりません。然し必ずしも道德的生活ではありません。なぜなれば道德とは

人間通常の道で、其辿るべき道を辿るのが道徳です。かくして親子相愛し夫婦相親しむのです。かくして此世が眞に樂しまるべき世と成るのです。道徳は云はゞ生を樂しむ爲の神の恩寵に過ぎないのです。私共は此道徳を行ふには必らず肉體を必要とする事を忘れてはなりません。肉體なくして道徳的な生活は營まれません。故に肉體の死と共に道徳的な生活も亦終を告げます。即ち知る道徳的な生活には限りがあります。永生ではありません。私は神の心に叶ふ生活それが即ち永生であると云ふやうな、抽象的な空虚な信仰には最早満足することが出来ません。私は人としての生命の如何にはかないものであるかを思ひます。私は神の子として生れ更なる必要を痛切に感じます。神の子の自由に入りたいと思ひます。神の子の自由に入り、死も猶亡すことの出来ない生活に入りたいと思ひます。私は唯漠然として形なき

靈の生活があるにしても、それには飛び付きたいやうなよろこびを感じることは出来ません。道徳の生活を營むに神は肉體を與へ給ひます。さらば神の子の生活を營むには、更により高くより貴き靈體を與へ給ふことを信ぜざるを得ません。パウロの所謂、肉の體あり靈の體あり、とは之でせう。基督の言を以て云へば、此世にては百倍をうけ後世にては永生を享くべしと云ふのと同じでせう『後の世にては永生』と云ふことを注意せねばなりません。此世の生活が更に向上進化して永生となることは明かです。私は此の第二の生活を考へるに、既に逝きし私共の愛する人々が復活して死せるにあらす生けるなりと喜び跳つてゐるのが見えます。肉の束縛を脱して絶對に自由なる愛の世界を想像します。そこには何の悲もなく憂もありません。神が天地創造の始めより、私共の永遠の住として備へ賜ふた神の國は、即ちそ

れです。私の心はこの榮光の國、自由の天地、愛の世界に向つて憧れます。けれども、私の罪はどうしませう。私は自分の罪に泣きます。其重荷にもがきます。私は如何にもがいても自分の罪は潔むることは出来ません。如何なる善行を積んでも罪を贖ふことは出来ません。私はたゞ私共の救主として罪に勝ち、世に勝ち、神に勝給ひし主イエス基督を信するの外はありません。主はその救の水を以て私共の罪を洗ふて、雪の如く清くなし給ひます。彼は私共を救ふ爲めには十字架の苦を敢へてし給ふのです。如何でか彼の救を呼ぶ者を、救ひ給はぬことがありませう。故に彼を享け其の名を信する者には、權を賜ひて此を神の子とせり。と使徒ヨハネは申しました。彼を信するものは、主イエスの靈によりて神の子として新に生み出されるのです。凡て彼を信するものは亡びることなく、永生をつぐことが出来るのです。人は

水と靈とによらざれば神の國に入ることは能はずとは永遠の眞理ではありませんか。

人間の努力

それ人は既に草の如く其榮
は凡て草の花の如く草は枯
れ花は落つ然れど主の道は
窮なく存なり爾曹に宣傳ふ
るは乃ちこの道なり

ハテロ前書一章二十四、二十五節

人間程不可解な者はない。之をつまらない者だと考ふるさ、どれ程弱い價值のない、つま
らぬものかわからない。碎けたる土器と云つて見ても碎けたる魂といつて見ても、人間の無
價值を云ひ現すには不十分である。それが墮落し果てた者のみが無價值かと云ふと、決して
さうではなく人は皆誰彼の差別なく無價值であつて、碎けたる土器と呼ばれるのは、決して
お狂亂の次三のみでない。天下に一人の義人なし。と聖書にある様に自分の魂が如何に罪に
汚れ、罪の爲めに破られて居るかを自覺せないものはあるまい。然し又、人間の尊いことを
考へて見るさ人間がどれ程尊いものかと云ふ事がわからなくなる迄尊い。それでお釋迦様が
其人間の尊さを自覺せられた時に、法悦のあまり、天上天下唯我獨尊。と叫ばれたのも無理な
らぬ。この天上にも天下にも比ぶべきものなき、尊き我と云ふものが又、決して釋尊一人

の専有ではない。其證據には如何なる惡人も悔改むれば、立派な聖者となるではないか。それは何故かと云ふと、御互人間の内には神の姿に似た尊い我、即ち人格があるからである。つまり私共人間は二種類の我を持つて居る。一は禽獸の世界に屬する我で、パウロの所謂外なる人である。外なる人は自然の法則に従ひ、肉體の生活を主とする者であつて、道德的に何等の自覺をもたぬ。けれども内なる人は道德の法則に従ひ、人格の生活を主とする者である。故にもし私共が外なる人、即ち禽獸的な我に主宰せられる時には、内なる人は何等の權威もなく、力もなく生命もなく、云はゞ罪の軛につながれて、自由を奪れたる奴隸の如くなる。如此人の行が人倫を破り、道德を亂すは言をまたぬ。夫に反して内なる人が權威をもつ時には、肉の慾も道に従て治められ處理せられる。其人格は勝利の月桂冠を戴いた英雄のやうに、

よろこびに充ち希望に輝くのである。この二種の我は私共の内に雌雄を争つて居る。此所に人間の矛盾煩悶がある。そこで私共は人間の努力にも、禽獸的な努力と精神的な努力と、二種類のちがつた努力がある事を知らねばならぬ。何れにしても人間の努力程驚くべき者はない。歴史は其活劇であつて、文明は其收穫である。もし人間の五尺の短身を無限大な宇宙に比したならば、それは蒼海の一粟にも當らない。この眇たる産物が無限大の宇宙に向つて戦を挑み、之を征服しつゝある事を考ふる時に、神が人間を祝福して、生めよ殖えよ地に満てよ之を従へよ之を治めよ。と云ひ給ひし意味が判る。人はやはり萬物の靈長として造られたのだと感ぜずに居られまい。事實エデンの園に生活せるアダムが、今は海を己がものとして魚の如くに潜航艇を走らし、大空を従へて鳥の如くに飛行機を飛ばし、電氣を僕として無線

の音信を傳ふるではないか。富を見よ、科學を見よ、工藝を見よ、二十世紀の文明を見よ、人間の努力の偉大なるを驚嘆せず居られるか、然し悲哉、二十世紀の文明は不具である。鳥は二の翼があつて飛び、車は二つの輪があつて動く、然るに二十世紀の文物はたゞ一の翼をもち、一つ輪を誇つて居る。彼の女はたゞ物質的の翼を以て天の高きに飛び、精神的の輪なくして地の廣きを進まんとするのである。その墜落し轉覆するは唯時間の問題である。今日の世界的大戦亂は、即ち廿世紀文明の墜落であり轉覆である。宗教的に云へば神の審判である。怒の鞭である。歐洲の文明は滅亡に近づきつゝある。やがて英米の文明も同じ運命に陥いる時が来る。而して戦争の終つた時、歐洲も北米も荒野となつた時、そこに又新たなる文明が起る。千年たち二千年たつ内には、現在の歐米諸國は此物質的文明の遺骸と共に地下數丈

の所に葬られる。而して今西洋の學者が、バビロンやカリラヤを發掘して古代文明のあとを尋ねるやうに、數千年後に於ては、東洋の歴史家が、ベルリンやロンドンやニューヨークを掘出しに來て、二十世紀の文明は古代のバビロン文明にも劣らない驚くべきものであつた、と新説を發表するであらう。

諸君歴史は繰返すと誰やらが云ひましたが、かう云ふ治亂興敗の繰返されるのは決して好ましくありませんけれども、イザヤの所謂野に呼べる人の聲がします。神の聲は破壊せられる文明即ち荒野に聞えます。人は皆草なり、その榮華はすべて野の花の如し、草は枯れ花はしぼむ、エホバの息その上に吹けばなり。……と、如何に今日の文明が其花の色香を誇つても、炎の如き神の怒が其上に臨む時に、草は枯れ花はしぼみ、國は亡び民は滅せず居ら

れるか、イザヤは歴史が常に治亂興敗の輪を廻はして進みつゝあるのみだ。もし文明が人間の努力であるならば、人間の努力は常にバベルの塔であると云はねばならぬ。バビロン文明と云ふバベルの塔の壊されたそのあとに、ペルシヤ文明の塔が立つた。そのバベルが又壊はされて、其あきこにギリシヤ文明、それから羅馬文明と、一の塔が立てられては壊され、壊されては又其後に更に又新たな文明が出でる。歴史の車は治亂興敗榮枯盛衰とめぐりめぐつて今日に至つて居る。かく神代ながらにめぐり來り、繰返し來つた歴史の車が二十世紀になつて、パツタリ止まると考へる人は、西に沈まんとする太陽を呼び返へさうとした清盛の類である。神を離れた人間の努力は常にバベルの塔である。其終局は滅亡である。それで使徒ペテロが、それ人は既に草の如く其榮は凡て野の花のごとし。草は枯れその花は落つ。と叫ん

だのは、單にイザヤの言を繰返したのではない。彼は神を離れたるローマ文明が既に草である事を見るが故に、其は枯れ其花は落つべき者である、とローマ文明の終局を豫言したのである。然らば二十世紀文明が同じく既に草である以上は、枯落は即ち彼女の戀人であると言はねばならぬ。

かく神は攝理の神であつて、人類の歴史を審判き、國家の運命を定め給ふ計りでなく、又人間各自の生涯を看みばし給ふのである。故に私共は自ら顧みねばならぬ。我等も亦、徒らに花の榮えを誇る草ではないか、我等の生活は果たして空しい努力ではないか、天につけりや地に屬けりや、汝の生活を導く『我』は外なる人が將た又内なる人か。

神を離れたる人間の榮華は朝には榮え、夕には刈られて枯るゝ草の花である。富も位も力

も智慧も人世一切の楽しみも、神を離れては空しき草の花である。試みに太閤秀吉を見よ、彼はナポレオン以上の英雄である。ナポレオンにはセント・ヘレナの一墓がある。けれども、太閤、最後に至る迄勝利の人である、彼は位人臣の榮を極め、彼の慾望を遂ぐる爲めには如何なる／＼犠牲をも惜まない。彼は全世界を彼のものとなさんとした。而して彼の一生は彼自身の慾望の満足より見れば勝利の生涯であつた。けれども見よ、眞暗い死の幕が彼を蔽はんとする時に、彼の辭世は何であるか、彼は彼の一生を云ひ現はして、

露とおき露を消えぬる我身かな

なにはの事は夢の又夢。

と歌つたではないか。彼の生涯は露の如くはかなく、夢の如く空しい。彼が馬上でとつた天

下も、功名も富貴も美女も、彼の一生の努力は、今將に破壊せられんとするバベルの塔であると云ふ事を覺つた。是れ實に太閤一人の悲しき自覺ではない。何人であれ、神もなく、信仰もなく、只己が野心と其慾望の爲めにのみ勤いそしまば、其人は既に草であつて、其求むる所のものはやがては、うつらふべき花である事を知らねばならぬ。

かく考へ來れば、昔の人が、バベルの塔を築いて、天に達せしめようとした其計畫が、神の大能の御手により、忽ちに破壊せられたと云ふ事を餘所事のやうに、愚な事だと笑ふわけにはゆかぬ。私どもも同じバベルの塔を築く爲めにあたら一生を費すことはいないか、この富を得よう、彼の位に上らう、この樂を満さうと、この山から彼の岡に、彼の岡からその澤にと慾望の満足を目標として、窮々乎として争もがく内に、思ひもよらぬ野原で、ひよつくり日が

暮れるやうな事はないか、私共は果して意味ある生涯を送つて居るか。

徒らに昨日も暮らし今日も亦

聞きて驚く入あひの鐘

ではないか。折角私共が築き上げた一生の努力は、バベルの塔のやうに死と云ふ神の鐵槌でめちや／＼になる事はないか。私共は何處に達せんが爲めに一生の旅路を辿つて居るのであるか。草は枯れ其花は落つ、是れ實に神を信ぜざる者の終局である。迷ふなよ、花の色香に神を離れたる文明や、衣食住や、如何に美はしくともそれは只花である。終局の目的でない。人生終局の目的は、決して物質的文明や衣食住ではない。それはたゞ花である。實を結ぶ爲め的手段である。方法であつて目的でない。私は決して花を以て不必要とは云はぬ。況んや之

を悪しと詛ふものではない。凡てのものはよからざるなし。神の世界に於て神を信ずるものにさりて、凡てのものよからざるなしである。花がなければ實はならぬではないか、肉體の生活なくして、精神生活の實は結べない筈である。物質的文明なくして精神的文明は徹底せない。けれどもその本末を轉倒しては不可い。即ち肉體は精神の爲めである。外なる人は内なる人の御用をつとむる爲めである。人は肉體を以て禽獸の世界に生活するにあらずして、精神を以て神の世界に生活するものでなからねばならぬ。言を換へて云へば、人は禽獸と共に生活するものではなく、神と共に生活し神と共にはたらく者である。外なる人は自然の世界に屬するが故に、花の落つるが如く、何れの日か地に落つる。死は即ち落花である。けれどもそれはそとなる人の死であつて、うちなる人の死ではない。落たのは花びらである。花で

ない。花は實となつてもこの小枝にあるではないか。その通りに内なる人即ち人格は肉體の神と共に終を告げるものでない。彼は肉體の神と共に更に更に新なる生涯に進むのである。花は實となつて同じ大能の御手にさへられて居るのである。故に

草は枯れその花は落つ、されど主の道は窮なく保なり。爾曹に宣傳る福音は乃ちこの道なり。と使徒パウロは宣傳へて居る。

彼の所謂窮なく存つ所の主の道とは何か、彼決して總ての花は實を結ぶとは云はぬ。

爾曹が再び生るゝは壞くべき種に由るに非ず壞くべからざる種即ち窮なく保つ神の活ける道に出るなり。

と云つて居る。壞くつべき種がある。壞くべからざる種がある。死すべき人がある。亡ぶべから

ざる人がある。肉の人として生れたるものは禽獸と共に死し、靈の人として主イエス即ち壞くつべからざる種によりて生れたる人は窮りなく神と共に保つのである。故に無窮の生命は神が主イエスを通じて、彼れを信する者に與へ給ふ最大の恩寵である。然かも此恩寵には主イエスの血の價がこもつて居る。即ち、

十八蓋なんぢら贖はれて先祖より傳はりたる徒き行より離れしは銀や金の如き壞るものに由に非ず十九疵なく汚なき羔の如きキリストの寶血に由ることを知ればなり

(マテロ前書一ノ十八、十九節)

かく私共はキリストの寶血に贖はれ潔められて、罪を解脱し、神の子の自由に入る事が出来たのである。何を以てこの高大無邊なる恩寵に、報い奉るべきかと云ふ事を考へずに居ら

れるか。此報恩の精神は信仰的活動の根本であり、動機である。報恩の精神我が内に燃え、感謝の涙我眼に溢れ出づる時、手は自ら働き足は自ら動いて、神の御工みわざの成就の爲めに動いそしむであらう。其汗に、其苦闘に、主イエスの所謂「我が喜び」が見出されないであらうか。而してこの新たな「喜び」を十字架の蔭に見出したる我等は主とともに、願くは聖名をあがめさせ給へ。と祈る事が出来る。

閉ぢたる室

十九節

此日の暮時即ち一週の首の日弟子等ユダヤ人を懼るゝに因て集れる所の門を閉ぢおきしがイエス來りて其中に立ち曰けるは爾曹安かれ

廿六節

八日を越し後また弟子等室の内に在りけるがトマスも彼等と偕に在れり門を閉ぢたるにイエス來りて其中に立ちて曰けるは爾曹安かれ

(ヨハネ傳二十章十九、廿六)

逾越節はユダヤ人の三大節の一である。それでこの國祭日を祝ふ爲めに、ユダヤ人と云ふユダヤ人は、世界のはてはてから、エルサレムへ押し寄せて來る。其數無慮幾百萬の多きに達する。されば、エルサレムの都は云はすもがな、ベツパゲ、ベタニヤの村に至る迄、遠來の珍客を迎ふるに忙しい。さなきだに滿都歡樂の叫び、ハレルの歌聲と相和して、シオンの山も鳴りどよむ計り。かゝる晴れやかな、芽出度き祝日の二日目であつた。基督の弟子等は、ジョン・マークの家に在りて、門を閉ぢ、憂に沈んで居た。彼等は主イエスを亡つて、深甚なる悲哀と寂寥感を感ずると共に、彼等も亦同じ悲惨なる運命に、歩一步、近づきつゝあるかの思を以て、ユダヤ人を懼れたのである。實に人の運命は計り難し。得意の絶頂に立つかと思れば、忽ちにして失意の谷底に陥ち、艱難の坂途を攀づるかと思へば、忽ちにして春光

融々たる平和の樂園に出づ。得意が誇るに足らず、失意が爰んで悲しまん。基督の弟子等を見よ、彼等が群集と共にイエスの前後左右に、ホザナを叫びつゝエルサレムに入りし時、彼等は今將に神の國が實現して、榮光の位に坐し、メシヤとして世界萬邦の民に君臨し給ふべき、イエスを想像したのである。彼等の得意は如何であつたか。然るに今は年來の志望も水泡に歸し、主イエスは遂にカルバリーの岡に十字架にかゝり、墓に置きし其屍すら見出すことが出来ぬ。憐れ御弟子等！榮華の夢もなか醒めざらん。見渡せば流轉の波音高し。思ひもつかぬ運命の磯邊。彼等が猫の前なる鼠の如くユダヤ人を懼れ、門を閉ぢて引き籠りし其の心事、思ふだに憐れである。神はこの可憐なる群羊を虎狼の荒すがまゝにすて給ふたか、主イエスは遂に彼等を顧み給はざるか、憂に曇りし彼等の眼は神を見ず、懼れに閉ぢし心の

戸は基督の爲めに開らかぬ。されど神は決して彼等をすて給はず、基督は決して彼等を忘れ給はぬ。かゝる折しも、主は閉ぢたる室に入り來りて、爾曹安かれ。と曰ふた。其御聲は確に聞なれし主の御聲である。其御姿は確に見なれたる主イエスである。御弟子等は夢かと許り喜んだ。主は再び、爾曹安かれ。父の我を遣す如く我も爾曹を遣さん。と曰ふた。云ひ換ふれば、懼るるもなく大膽に、出で、戦へ、と命じ給ふたのである。彼等は果して安きを得しか、出でて戦ふべき勇氣を得しか、八日の祭禮は過ぎた。人々は思ひくゝに歸り行き、エルサレムは暴風のあとの如く靜になつた。然るに弟子等は依然として門を閉ぢて不安にみちて居た。再びイエスは現はれて、三度爾曹安かれと云ひ給ふた。此時、疑ひ深きトマスも遂にイエスの甦を信じて、我主よ我神よ、と喜び叫んだと云ふことである。

この一條の物語について注意すべきとは、第一「門を閉ぢ」門とは家の入口である。複數であるから、表の入口も、裏の入口も、而して弟子等の集つて居た二階坐敷の入口も悉く閉してあつたことが知れる。如何に丈夫に出来た門戸であつても、要するに一枚の戸ではないか、毀さば忽ちに毀はし得べし。閉ぢたりさて何程のことがあらう。けれども、この頼甲斐なき戸を閉ぢて、せめては幾分かの安きを得ようと試るのが人情の弱點である。人は悲しみの時に戸を閉ぢる。憂の日に戸を閉ぢる。戸を閉ぢて思案に迷ひ煩悶にかきくれる。けれども戸を閉ぢると云ふことは、安きを得る最上の道でない。兵法に虚々實々と云ふことがある。諸葛武侯は屢此の兵法を用ゐ、小軍を以て大敵を退けた。彼は雲霞の如くに押寄せる敵軍の前に城門を廣く開いた。城中又一兵卒の影だにない。城内に侵入せる敵軍は之を見て却て不安の

念に襲はれる。又もや孔明の謀に陥たのではないかと躊躇する。かゝる折しも一發の砲聲を合圖に伏兵四方に起りて流石の強敵も散々に打ちなやまされて見苦しき敗北をする。かく虚々實々は寡を以て衆を制する最善の方法である。生の戦に於ても之を要する場合がある。即ち悲痛慘憺たる大敵に押寄せられたらむ時は、戸を閉ぢる代りに、廣く門を開くのである。少くとも心門を解放するのである。心の根城を大能の神に明け渡すのである。心中又一點の我影なき迄に、兵を伏せるのである。即ち我を以て戦はず、潜在せる神の聖靈に由つて戦ふのである。かくの如くにして、弱よく強を制することが出来る。パウロの所謂、「この故に寧ろ欣びて自己の弱に誇らん、是基督の能われに富らん爲なり」とは之を謂ふのである。基督は門を閉ぢて震ひをのゝきつゝある弟子等を見て、如何なる感想を抱き給ふたか。人の弱き

を知り給ふ主は、弟子等の弱を見て之を咎め給はぬ。其御聲には大慈大悲の響がある。自らに強しと思ふ、シモン、ペテロも、イエスの眼には、サタンの爲に、夢の如くに虐げられんとする憐れなるシモンである。彼は、主よ我、獄に迄も死に至る迄も爾と共に往かん、と心を定めた。と叫んだ。其語氣には確に堅實嚴をも貫く可き決心が見えた。けれども弱きシモンは主の豫言し給ひし如に、三度主の弟子たることを拒んだ。シモンすら既に弱者である。況んや他の弟子等をや。然るに主は斯る弱卒を用ゐて、悪魔の大軍を征服せんとし給ふ。彼には勝利の確信がある、何等失望の色が見えぬ。汝等懼る、勿れ、我れ既に世に勝てり。父の我を遣ししが如く我も爾曹を遣さん、出で、戦へと命じ給ふた。徒らに憂ひ悲しむは、主を信するもの爲すべきことでない。戈を陣頭に振つて倒れて後止む。

第二、爾曹安かれ。主は三度爾曹安かれと云ひ給ふた。信することの遅き弟子等には、爾曹安かれ、と云ふ主の御言も、遂に無効であつた。三度此言を繰返し給ふに及んで、漸く感恩の曙光が見えた。思ふに人の解脱すべき三種の不安がある。第一は肉體の不安である。第二は良心の不安である。而して第三は信念の不安である。人は三重の關係の内に生存する。第一は自然との關係である。人は肉體を以て自然界に屬する。故に自然の法則に従つて外界と相和するにあらざれば、疾病災害の不安を來たすのである。人は精神を以て道德の世界に住む。故に道德の法則によりて人と人との調和を保たざる限りは安かでない。人は魂を以て心靈の天地に活る。故に信仰を以て神に對し神と人との和を保つにあらざれば心平かでない。一は自然との關係を正し、二は人倫の關係を全し、三は、神人の宗教的關係を結ぶことにより

て、始めて不安の下界より解脱超越することが出来るのである。如上三重の關係の破綻を來すものを罪と云ふのである。故に罪の解脱なくして、不安の下界を超越することは出来ないのである。甦り給ひし基督が第一に發し給ひし、爾曹安かれは、如何なる程度迄、弟子等を救ふたか。肉の不安である。彼等は肉に囚れて居た。肉の安全を保たんと欲して精神の世界に門を閉ぢた。甦り給ひし主は、肉の生命を超越せる久遠の生命を示し給ふた。やがて肉の不安は消えた。さらば第二の御言は如何なる意味に於て安きを與へたか。良心の不安である、彼等は良心の叫よりは寧ろ人の云ひ傳へに囚へられて居た。道德の形式に縛られて居た。法律の下に居た道德は彼等を指料するものにあらずして、彼等は道德を形づくる者であることを知らなんだ。道とは豫め定められたる行爲の方式と云ふよりは、寧ろ、内の光であつ

て、この光に照されて進み行く人の足跡であり、踏む地であると云ふことを知らなんだ。イエスが、氣を嘘きて聖靈を受けよと云ひ、又た爾曹誰の罪を釋すとも其罪ゆるされ、誰の罪を定むるとも其罪定めらるべし。と云ひ給ひしを思はゞ、第二の解脱は道德的解脱であることが知れる。かく肉を解脱し道德を解脱して肉以上の生命を認め、道以上に自我の尊重すべきを教へられたる弟子等は、更に、今一段の解脱を要したのである。第三の御言は即ちそれが爲めである。云ひかふれば弟子等は信念の不安より救ひ出されねばならぬ。彼は是迄人として彼等を愛し給ふたナザレのイエスに執着した。イエスは勿論偉大なる人格である。歴史上に於て誰か彼の上に出づる者があらう。彼の神觀に於て、將又、未來觀に於て、彼れ程徹底した、然かも幽玄の大眞理を洞察せるものはない。彼は道の現化であり、ロゴスのインカルネ

「ジョンである。と使徒ヨハネは頌賛して居るが、何人も其の言の至當なるを否定することは出来ぬ。彼は確に人の子である。彼れ自身の言を以て云へば人の子である。人類そのもの、理想である。理想的な人格である。宇宙の大理想は彼の内にありと云はねばならぬ。けれども彼はあく迄も人である。この人なる基督は十字架のバプテスマによりて久遠の基督に生れ變り給ふたのである。弟子等は歴史的のイエスに憧れて、未だ久遠の基督あるを識らぬ。彼等と物語る者は一の幻影であると想像して居た。トマスが其指を伸べ其手を伸ばして、主の手に觸れ主の肘を探すに及んで、始めて主の實在を信することが出来た。ナザレのイエスにも執着する間は信念の不安は免かれない。久遠の基督を信ぜよ、信ぜざる勿れ、信ぜよ、見ずして信する者は幸なり。神はナザレのイエスを立て、獨子の榮ある位を與へ、萬民の救主と

して彼を立て給ふたのである。凡て彼をうけ其名を信するものは、亡ぶることなくして永生に入ることが出来るのである。歴史的のイエスを亡ふて門を閉ぢし弟子等は、久遠の基督に迎へられて、憂愁の門を押開らきて出でぬ。

大正八年六月十日印刷
大正八年六月三日發行

隣れる部屋
定價四拾五錢

不許複製

翻譯者 竹崎八十雄

發行者 福永文之助

印刷者 澤田文雄

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

發行所 警醒社書店

電話 東京五五八七番
新橋一五八七番

有森 島本 武厚 郎吉 共著

傳ントスダンビリ

本書は
久しく品切のところこの
たび新たに有森島本兩先
生の長序を頂き巻頭に附
して第四版を發賣仕可候。

□定價壹圓以下□

著者 有森島武郎
編輯 伊藤ツトマシ

集詩ンマトツイホ

定價四拾錢
郵稅四錢

靈魂不滅論 ■ 柏木義圓著 □

定價二十錢
郵稅四錢

宗教と現世 ■ 内村鑑三著 □

定價一圓廿錢
郵稅十二錢

有神論體系 ■ 富永徳磨著 □

定價一圓七十錢
郵稅十二錢

現世と未來 ■ 武本喜代藏著 □

定價二十錢
郵稅四錢

不朽の道 ■ 松村介石著 □

定價五十五錢
郵稅八錢

パンヤン原作
天路歷程 □ 松本 雲舟譯 □ 價一圓七十錢 □ 郵稅十八錢

パンヤン原作
聖戰 □ 松本 雲舟譯 □ 價一圓三十錢 □ 郵稅十二錢

パンヤン原作
恩寵溢るゝの記 □ 松本 雲舟譯 □ 價一圓三十錢 □ 郵稅十二錢

ワレンス原作
星をめぐあてに □ 松本 雲舟譯 □ 價一圓七十錢 □ 郵稅十二錢

フランス原作
タ イ ス □ 水野 和一譯 □ 價一圓 □ 郵稅十二錢

シエクスピヤ原作
マ ク ベ ス □ 森 鷗 外譯 □ 價並製一圓卅錢 □ 郵稅八錢

イアセン原作
ノ ラ □ 森 鷗 外譯 □ 價一圓三十錢 □ 郵稅八錢

マロー原作
未だ見ぬ親 □ 五來 素川譯 □ 價一圓二十錢 □ 郵稅八錢

ダンテ原作
神曲 (地獄篇) □ 山川丙三郎譯 □ 價一圓五十錢 □ 郵稅八錢

ダンテ原作
神曲 (淨火論) □ 山川丙三郎譯 □ 價一圓五十錢 □ 郵稅八錢

著者 內村 鑑三

編纂者 內村 上賢 鑑三

內村全集(第一卷)

(第一卷內容)

基督信徒の慰。求安錄。宗教座談。
傳道之精神。

內村鑑三先生の筆が明治大正の基督教界に於て獨異の地位を占めその永遠的價値の豐なる者あるは多くの人の疑はざるところなり。而してその永遠的價値を恒久的形式の中に包むは最も緊要の事に屬す。本社茲に見る所あり今回先生に乞ふて其全集を出版せんとす。乃ち數年間の繼續事業として先づ既刊の著書より始め漸次研究誌上所載の文章に及ばんとす。編纂者に於て充分の改竄斧正を加へて面目一新せる外、全集として保存するに適すべく表装の堅牢と體裁の質實と校正の嚴密とを期せり。讀者これを讀みて自ら利するのみならず、又實に家寶として子孫に傳へ得べきなり。

終

